

(書評)

『シン読解力 学力と人生を決めるもうひとつの読み方』(東洋経済新報社)

著者 新井紀子

## 1 第一印象

タイトルが怪しい。冗談半分か？

「シン」は『シン・ゴジラ』が始まりらしいが、あの映画はちっとも面白くなかった。数日前に紹介した『おいしい雑草図鑑』の帯にも「シン」が使われていた。あれは帯だから、我慢できる。

「シン」には、新、真、深、神、芯、信、清、新、慎、進などの含意があるらしいが、私にとっては辛だよ。

「もうひとつの読み方」は意味不明。「もう」ではない「ひとつの読み方」って何？ 誤読のことらしいが、本書が解決しようとしているのは、誤読の弊害ではない。それも扱ってはいるが、ほとんどは稚拙な読み方だ。だから、「もうはひとつ」ではなく、〈三番目の「読み方」〉とすべきだ。

私は『AIvs.教科書が読めない子どもたち』と『AIに負けない子どもを育てる』を読んでいたから、この本も読む気になった。そうでなければ、手に取ることさえしなかったろう。

＊

学力(言い換えればシン読解力)の状況が厳しい学校ほど、この單元には十分に時間を割くよう教えています。

(「トレーニング&コラム」p48)

＊

意味不明。

「学力(言い換えればシン読解力)」というのなら、副題の「学力と人生を決めるもうひとつの読み方」は〈「シン読解力」「と人生を決めるもうひとつの読み方」〉と読解するのかい？

〈「学力」～「の状況」〉は意味不明。

「厳しい」は意味不明。財津一郎の「キビシー！」ってのと同じ雰囲気かな。

〈「單元には」～「時間を割く」〉も変だ。「單元には」は〈「單元」を教えるとき「には」〉の不適切な省略か。不明。

「教えています」の主語は誰？ 教わっているのは誰？ 〈私は教師たちに対して《あなた方が生徒たちにこの単元の内容を教える場合は十分に時間を割くようにしなさい》と教えています〉という意味だろうか。不明。

著者は、自分では丁寧に説明しているつもりらしいが、実際には意味不明の悪文がちらつく。また、意味は明解でも、根拠を示さずに決めつけることがある。癖みたい。

『夏目漱石を読むという虚栄』(2112 「その人」と「常に」) 参照。

この本は悪書ではない。だが、全幅の信頼を置くことは、キビシー！  
ただし、役には立つ。叩き台として使える。

## 2 「まえがき」(1)「教科書くらい」

次のような文を、私は読みたくない。苛々する。

＊

RST を通じて中高校生の実態を知れば知るほど、彼らが社会に出る頃には、AI に仕事を奪われかねないと危機感が募るようになりました。

(「まえがき」 p1～2)

＊

「RST」は「リーディングスキルテスト」(p1) の略。

〈何かのテストを「通じて」〉は意味不明。

「実態」は〈芳しくない「実態」〉などの略か。

「社会に出る」は意味不明。シン意味は〈会社に入る〉だろう。

「彼らが社会に出る頃」に「社会」はどうなっているのだろう。私は知らない。

「仕事」は〈賃労働〉のことだろうね。家事や育児や介護は「仕事」じゃないらしい。支障木を切るのは、義務でなければ、「仕事」ではなくて、遊びかな？ 物理学の「仕事」と『自殺仕事人』の「仕事」と……。ああ、もういい。止め。

十数年後には求人率はものすごく低くなっているかもしれない。ほとんどの会社がなくなっているかもしれない。大半の若者はフリーランスに、あるいはホームレスになるのかもしれない。そのとき、必要なのは、生活保護を受給するための書類を読んで理解する能力だろう。

「奪われ」はポエムだね。AI が何かを奪うことはない。人格がないんだから。釈迦に説法だろうけど、一応、書いておく。

「危機感」は意味不明。「中高校生」の抱く「危機感」なら、意味としてはわかる。しかし、すでに職のある著者が抱く「危機感」は不可解。

「危機感が募る」は意味不明。

＊

『AIvs.教科書が読めない子どもたち』が世に出ると、「前半」の「AI」より、後半の「教科書が読めない子どもたち」に注目が集まり、さまざまなメディアに取り上げられました。「教科書ぐらいいは誰でも読めるはず」と考えられていたことにフォーカスが当たったのはとてもありがたいことでしたが、一方で大きな違和感も覚えました。

「だから、国語が大事」、「若者に読書をもっとさせなければいけない」という結論で締めくくるメディアや識者がとても多かったからです。

(「まえがき」 p2)

＊

「教科書くらいは誰でも読めるはず」と考えられていたこと」に関係した胡散臭いルポを、私はすでに批判している。

(GOTO 『夏目漱石を読むという虚栄』 7310 『ルポ 誰が国語力を殺すのか』)

「考えられていたことにフォーカスが当たった」は意味不明。

〈違和感を感じる〉は重言だが、〈違和感を覚える〉は許容されている。しかし、私には違和感がある。〈違和感を自覚する〉というのなら、問題はない。

『AIvs.教科書が読めない子どもたち』の次は、『『AIvs.教科書が読めない子どもたち』が読めない「メディアや識者」たち』を書いてもらいたかったね。諸悪の根源は、知ったかぶりの「メディアや識者」なのだ。私は彼らを〈知識人〉と呼んで警戒している。知識人とは、素人でも玄人でもない、お笑い芸人に毛の生えたような物書きのことだ。たとえ何かの専門家でも、自分の専門領域から逸脱した素人考えを偉そうに発信する連中も含まれる。

(GOTO 『夏目漱石を読むという虚栄』第七章予告)

「メディア」と「識者」を並べるのは無意味。「や」は怪しい。他にも誰かがいるみたいだよ。いるんだろうね。誰？

20世紀の「メディア」関係者は、怪しげな物書きである「識者」を量産した。逆ではない。悪いのは「識者」ではなく、「メディア」関係者だ。21世紀、インターネットが低劣な物書きを量産している。逆ではない。読解力を話題にする場合、まず、「メディア」関係者と「識者」の怪しい関係について暴露すべきだ。

著者は、〈自分の作文が誤読された理由は何か？〉といった反省をしないらしい。いくら自分の作文に自信があったとしても、誤読される可能性は想定すべきだ。なぜなら、著者の想定する読者は「シン読解力」の足りない人々だからだ。あれ？ 違ったかな。まあ、いいや。

次の文はさっきの引用の続きだが、一行空きになっている。その理由は不明だ。

＊

そんなわけがありません。学校図書館の本は読破し、国語では常にトップという成績でも、数学の教科書が読めないということはいくらでもあります。

まさに私がその例だったのです。

(「まえがき」 p2)

＊

「数学の教科書が読めない」なんて「そんなわけ」はない。「読めない」のシン意味は、〈「読め」ても理解でき「ない」〉だろう。ああ、面倒くさい。

「いくら」あるの？

また、意味不明の一行空きだ。何なんだよ、もう。

「まさに」は意味不明。

「私はその例だった」は意味不明。

「私」以外の「例」は、「いくら」あるの？

へえ、「読破し」たの？ 本当に？ 非常に小さな「学校図書館」なのかな。だったら、〈図書室〉というか、いや、〈本棚〉が適当だろう。

前段の「ことはいくらでもあります」は〈人は何人でもいます〉と明言できない気分を隠蔽するためのポエムだったらしい。著者は「同種類の多くの事項を類推させるために、特にその中から指摘する事項」(『広辞苑』「例」といった「例」の作法をひっくり返して悪用しているのだろう。つまり、「例」について調べていないのに、〈自分は例外ではない〉という根拠のない印象を読者に与えようと気張っているわけだ。怪しい人だよ。

疲れる～

私には、この本が読めない。一応、通読したが、すらすらとは読めなかった。

私はこの本に対して「大きな違和感」を抱いている。よくもこんないい加減な作文が出版できたものだ。ただし、出版に関する責任を負うべきなのは、著者ではなくて、校正係だ。無責任な彼らの「仕事」なんか、さっさと AI に奪われてしまえ。

待てよ。すでに奪われているのかな？

### 3 「まえがき」(2)「物語の読み方」

日本人の読解力が伸びない理由は、読解が困難な悪文を名文として称揚する文化があるからだろう。名文と迷文の区別を付けない。言わぬが花。

この本の著者も悪文家だ。

この本で紹介されているテストをやると、読解力が育つ。だが、残念ながら、この本を通読すると、読解力が衰える。マッチ・ポンプの逆のポンプ・マッチだ。

著者には推敲の能力が足りない。自分の文章を読み返すときには「シン読解力」が働かないのだ。

どうして『AIvs.教科書が読めない子どもたち』の「教科書が読めない子どもたち」に注目が集まったのか？ この文言がプロパガンダのスタイルだからだ。新井が〈読めても理解できない〉と正確に作文すれば、俗受けしなかったろう。

＊

どうやら、私は自己流で身につけた「物語の読み方」で、あらゆる教科書を読もうとして、数学や物理・化学など、いくつかの教科書の読み方に失敗していたらしいのです。

(p4)

＊

この本のどこにも普通の意味での「物語の読み方」は記されていない。だから、「自己流で身につけた「物語の読み方」」を推測することは不可能だ。著者がまずやるべきこと

は、「自己流で身につけた「物語の読み方」」を開示して、そして、それを解体することだ。

＊

場合によっては、読書で身につけた自己流の読みが、一部の教科の読解を阻害することさえあるのです。

(p4)

＊

困るよ。さっきは「物語」だった。今度は「読書」だよ。

＊

作者の見聞または想像を基礎とし、人物・事件について叙述した散文の文学作品。

(『広辞苑』「物語」)

＊

「物語」には怪しげな含意がある。だから、「自己流」と馴染む。しかし、「読書」にそうした含意はない。

この「読書」の対象には「一部の教科」に関連する本が含まれないらしいが、そうだとしたら、なぜか？ 例えば、数学の教科書や参考書などとは別に、数学の歴史に関する本や数学者のエッセイなどがいくらかでも出版されている。新井は、それらを読まなかったのか？ そうした本が「学校図書館」になくても、本屋にはある。県立図書館などにもある。そのはずだ。

この「読書」という語に含意があるとしたら、〈対話の不足〉だろう。新井は〈自分の物語〉の主人公がボッチだったことを隠蔽している。暗い青春の記憶を隠している。「書物で城壁をきずいてその中に立て籠っていたような」(『こころ』「下 先生と遺書」二十五) 未成年者だったときの感情を隠している。切ない体験を忘れようとして研究に逃避している。そんなふうに勘繰られても仕方あるまい。

研究者の新井ではなく、この本の作者である新井は、〈「自己流で身につけた」物語の書き方〉を継続しているのだろう。

『日本沈没』(小松左京)が思い出される。この小説には科学的知識が多く含まれている。しかも、執筆当時としてはかなり先進的な知識だったようだ。だが、実際には、日本列島は沈没しなかった。いつか沈没するかもしれないが、小説で描かれた時期には沈没しなかった。

『シン読解力』も同様だ。この「物語」に紹介されている「RST」がいくら立派だとしても、これによって「AIに負けない子どもを育てる」なんてことはできない。なぜなら、AIも「RST」を取り込むからだ。鼯ごっこなのだよ。

小松は、なぜ、『日本沈没』を構想したのか。そのヒントになるのが『日本売ります』だ。そして、その根っこにあるのが『日本アパッチ族』だ。小松は、大東亜戦争に纏わる

思いを虚構によって発散してきた。私には、そのように推測できる。また、その種の推測を小松は否定しないと思う。彼は自分の思いを自覚していたことだろう。

ところが、『シン読解力』の著者は、執筆の動機を自覚できていない。自分が「物語」を作っていることに気づいていない。新井は悪文の「物語」を読み過ぎたのかもしれない。あるいは、普通の「物語」の不完全な記憶の文体を模倣しているのだろう。

研究者としての新井と、この本の著者の新井は、別人格だ。

裏返せば、研究者としての新井は〈『シン読解力』の物語〉の主人公を演じていることになる。ただし、小松と違って、そうした自覚はない。だから、平気で悪文を綴る。この悪文は、言語化されていない〈自分の物語〉の断片だ。著者は、存在しない物語を「読破し」たつもりになっていて、それを文脈として文を拵えているわけだ。

「AIに仕事を奪われかねない」という「危機感」を抱いたのは、新井のインナー・チャイルドだろう。そのように解釈すると、新井の悪文の〈シン意味〉が、何となくだが、想像できるようになる。

新井は、「自己流で身につけた「物語の読み方」」に関して、ひどく後悔しているようだが、ちっとも反省していない。反省せずに、後悔の苦しみを薄めるために研究を続けているのだろう。新井は、「自己流で身につけた「物語の読み方」」を必要とした理由について、反省しなければならない。そして、まっとうな作文を心掛けなければならない。たとえば、「シン」が〈syn〉だか何だか、ちゃんと説明してくれなくてはならない。

ところで、この本の校正係も、「自己流で身につけた「物語の読み方」」を処理しないまま、「仕事」を続けてきたようだ。

『校閲ガール』を読んでくれよ。

読んでも、理解できないか？

(GOTO 『夏目漱石を読むという虚栄』 4 3 2 2 「探偵<sup>たんてい</sup>」はいない)

#### 4 「まえがき」(3)「一般的にイメージされている読解力」

苛々が続く。

なぜなら、私は自分の読解力に自信がないからだ。

この本で提出されている問題のほとんどは簡単に解けた。解けなくても、解けない理由は簡単に知れた。

だが、自信がない。

今、書きたいから書いているだけだ。無理に読んでくれなくてもいい。

＊

50万人のデータを見ても、「読解力には読書ですよ」とおっしゃる方は減らないかもしれません。あるいは、逆に私が伝えようとしていることを「読書の効用を否定している」と受け止める方もいらっしゃるかもしれません。そこで、「教科書を読み解くために

必要な読解力」のことを、一般的にイメージされている読解力とは明確に区別するために、「シン読解力」と名づけることにしました。

(p6)

＊

意味不明。

「50万人のデータ」で十分なのか？ 十分だという証明はやったのか？ 「データ」の量と質の関係は、どうなっているの？ 私は統計を勉強していないし、そもそも興味がなから、実はどうでもいいことだけど、やはりきちんとした説明をしてほしい。

「読解力には読書ですよ」は意味不明。こんなことを「おっしゃる方」なんか、無視していい。いや、無視すべきだ。阿呆と一緒に。

「逆に」は変。こういう変な「逆に」は流行語らしい。

「伝えようとしていること」は変だ。〈伝えたこと〉でしょう？ 謙遜するとしても、〈伝えたつもりのこと〉でしょう？

「読書の効用」は意味不明。私の知る限り、専門書以外の本を読みまくる人には読解力が足りない。つまみ食いをするから、たくさん読めるのだろう。「効用を否定して」は意味不明。近頃、こういう「否定」の用い方が流行しているらしいが、嫌だ。もぞもぞする。こんなしどろもどろの感想を述べる人のことも無視すべきだ。

『AIvs.教科書が読めない子どもたち』や『AIに負けない子どもを育てる』は、なぜ、このように誤読されたのか？ しかも、「逆」の二種の誤読がされたのは、なぜなのか？ 新井の作文が曖昧だからだろう。

「そこで」って、どこで？ こういう変な書き方をしたら、誤読されて当然なのだ。

この「教科書」に「国語」は入らないんだよね。そこんところ、はっきりさせなきゃ。日本人の読解力が頭打ちになるのは、国語科の教科書がお粗末だからではないのか？

「教科書を読み解く」は〈「教科書」の文章を「読み解く」〉の不当な略だろうが、こういう我儘な書き方をする人が……

ああ。苛々する。

「一般的にイメージされている読解力」って、どんなの？ 私は知らない。どうしたら知ることができるの？ 「イメージされている」何かと「明確に区別する」って、どういう作業？ 「シン読解力」という意味不明の新語によって、どうして曖昧な意味の古語と「明確に区別する」ことができるの？

新井は、二種の、逆の誤解をする人たちと、それぞれ、あるいは三者で議論をしたことがあるのか？ そして、そいつらの考えを変えさせたことがあるのか？ ないんだよね？ その人たちは、どうせ、『シン読解力』さえ誤解するに決まっているのさ。なぜなら、新井の作文は忖度をしないではいられないような悪文だからだ。忖度は誤解の始まりになる。

新井がいくら頑張っても、誤解をする人たちは減りっこない。「自己流」の読み方を変えたくない人たちが国語科の教師だったり、ジャーナリストだったり、ベストセラーの著者だったりするからだ。日本人の多くは、「明確に」語られたり記されたりする文を毛嫌いする。それどころか、あるテーマに関して何の知識もない芸人なんかはテレビのコメンテーターをやってやがる。こうした奇々怪々な風習が続く限り、新井の考える「一般的にイメージされている読解力」は、「否定」どころか、〈肯定〉され続ける。むしろ、立派なものとして尊ばれる。

明治には、近代日本語を急造せざるを得なかった。その仕事をやったのは、翻訳者たちだ。大卒の小説家や随筆家や思想家が、そうした文体を模倣し、曖昧で気障な作文を量産した。出版人は、外国語に翻訳できない和漢洋混交の怪文書売りまくった。中途半端な文章を、文学青年崩れどもが国語科の教科書に掲載した。やがて、言葉ではなくて〈空気〉とやらの流され、勝てっこない戦争をおっぱじめる。惨め。

読解力を駄目にしてくれる犯人は、翻訳できない翻訳者どもや、詩を書かない詩人どもなのだ。

新井は、どうかな？

「シン読解力」を培うために読むべき日本語の本はあるのか？ 翻訳書でもいい。それがあるのなら、「逆に」、「読書の効用」を「否定」すべきではなかろう。

私が推奨するのは、星新一の短編だ。ただし、ソ系語の濫用という欠点がある。

ところで、星の作品だったと思うが、〈肩にロボットの鸚鵡を載せて、そいつに自分の独り言を翻訳させる〉というのを読んだことがある。人間がぼそぼそと寝言みたいに自分勝手にしゃべったことを、ロボットの鸚鵡がきちんとした文に作り替えてくれるのだ。その世界では、ロボットの鸚鵡同士が話し合い、人間どもはぼんやりと暮らしている。

SFではなくて、現実には、やがて書く人はいなくなる。呟きで十分だ。さらには、AIが人間の脳波か何かを読み取って立派な作文をしてくれるようになる。その作文を別の人のAIが読み取って、その人の脳を刺激する。いや、もう、AIは作文もしない。脳と脳が繋がる。そんな時代が、近い将来、現実になって来ることだろう。作文力も読解力も、どちらも、もう、要らない。AIに上手に負けてやれるようでない、「逆に」、「仕事」は貰えないかもよ。

## 5 「まえがき」(4)「落ちこぼれて」

「学力」って何？ 「学業成績として表される能力」(『広辞苑』「学力」②)のことだとしたら、〈学力検査は常に正しい〉ということ、著者は先に証明すべきだろう。

「学力」と「人生」を並べるのはおかしい。〈人生力〉とでも並べなさい。〈「学力」を「決める」〉も「人生を決める」も意味不明。

\*



小学校では勉強もできてコミュニケーション能力も高くクラスの人気者だったのに、中学校から、あるいは高校から急に落ちこぼれてしまう子が時々います。家庭や友人関係が原因だということもあるでしょうが、ある時点から急に勉強が苦手になってしまうというケースについては、「シン読解力」で説明できるかもしれません。

(p 6)

＊

もやもや、もやもや。

「勉強も」と「能力も」というふうに並べるのは、不合理だ。「勉強」ができたから「クラスの人気者」になれたのか。違うよね。

この「時々」は、ありふれた誤用だ。

「原因」は、「中学校」や「高校」の教育の仕方にあるのではないか？ 「中学校」の教科書には悪文が掲載される。「高校」だと悪文だらけになる。違う？ 新井は教科書研究を先にやるべきだ。

「ある時点から急に勉強が苦手になってしまうというケース」限定なの？

「ケースについては、「シン読解力」で説明できる」は、〈「ケース」の原因「について」は、「シン読解力」の不足ということ「で説明できる」〉の不当な略だろうか。しかし、このように補足しても納得できない。私は、〈説明できないぞ〉と言いたいのではない。「説明」の中身が不明なのだ。ずっと先の方に書いてあるのかもしれないが、そうならそうとだね……

ああ。面倒臭い。

＊

また、営業成績もよくて社内でも評価されているのに、管理職になってデスクワークが多くなったとたん、精彩がなくなってしまうという大人も少なからずいるようです。それも原因が「シン読解力」にあるのかもしれません。

(p 6)

＊

「営業」は会話の能力と関係があるはずだ。

「成績も」の「も」は怪しい。「も」は「それ一つではない」(『広辞苑』「も」)という意味合いで用いる。ただし、通俗的には強調のために用いることがあるから、この「も」は言葉遊びのようなものなのかもしれない。

「社内でも」の「も」も怪しい。「社内でも」は〈社外でも「社内でも」〉などでないと成り立たない。「評価されて」は舌足らずだ。「営業」が話題だから、〈社外でも〉は明記する必要がない。ということ？

「評価」について、「その価値を高く認めること。「能力を一する」」(『明鏡国語辞典』「評価」②)と記す辞書はある。しかし、こういう用法だと、次のような誤解が生じるかもしれない。

A あなたはこれを（高く）評価するか。

B 私は評価（ということ）をしない。

括弧内の思いが互いに通じないと、「営業」ではトラブルになるよ。

「精彩」は意味不明だ。「いきいきと元気にあふれた様子。「一を欠く」（『広辞苑』「精彩」）というのが普通だろう。

「それも」の「も」は、この前段で述べられていることと関係があるので不適当ではない。だが、少し離れているので読みづらい。先に指摘した二つの不適当な「も」も、前の段落の雰囲気を読んだらと引きずっているのかもしれない。

「それも原因が「シン読解力」にある」は〈その原因も「シン読解力」の不足にある〉などが適当だろう。

「デスクワーク」は、ここでは〈文書を読む仕事〉という意味らしい。しかし、普通は「事務・勉強・執筆など」（『広辞苑』「デスク・ワーク」）のことだ。

読解力の不足のせいで仕事が捗らないという可能性は十分にある。だが、別の理由も考えられる。「社内」で作られる書類が悪文だからだからかもしれない。あるいは、この人物の作文力が不足しているせいかもしれない。

新井の書くような悪文を読まされ続けたら、誰だって精彩を欠くようになるさ。

## 6 「まえがき」(5)「誰でも読めばわかるはずの文章」

私は、普通の書類さえろくに読めないことがある。誤読どころか、通読することさえ困難な場合が少なくない。常用漢字程度なら読めるから、音読はできる。しかし、理解できないことが少なくない。私だけの欠陥か？ そうではなかろう。多くの書類は、わざとのように難しく記されているのだ。本当に理解できるのは、専門家だけだろう。

私が気に病んでいるのは、そういうややこしい文章のことではない。次のような、一見ありふれた文が理解できなくて困っている。

＊

本来「誰でも読めばわかるはずの文章」が読めないのはなぜか。

(p 8)

＊

「本来」は意味不明。

「誰でも読めばわかるはず」と決めたのは誰？

「誰でも読めばわかるはずの文章」というふうに鉤で括られている理由が不明。

「わかる」と「読めない」の関係が不明。

この文は、次の二つの文がごっちゃになったものだろう。

A 誰でも読めるはずの文章が読めない。

B 誰でもわかるはずの文章がわからない。

この文は悪文なのだ。

新井は、〈読む〉と〈わかる〉を区別しない。とんでもないことだ。

＊

「問題を解く」、「知識として覚える」、「やる気を出す」といったところで差がつく前に、「読めない」で差がついてしまうとしたら、これを放置していいはずがありません。

(p 10)

＊

何なんだろうね、この三つの「ところ」は？

この「読めない」の真意は〈わからない〉だろう。

「差」は、何との「差」か？

「これ」の指す言葉は、〈「読めない」で差がついてしまう」状態〉か？

「放置」は流行語だろうな。

こういう悪文を「誰でも読めばわかるはずの文章」として提示されたら、「やる気を出す」どころか、ウッセエと怒鳴りたくなるよ。

## 7 「第1章 チャット GPT の衝撃」(1)「読画」

新井はソ系語を濫用する。

＊

それは、私にとっても衝撃でした。

(p 18)

＊

「それ」の指す言葉が見つからない。

「とつても衝撃」とある。「も」が怪しい。他の誰にとつても「衝撃」だったのか。

次の段落に含まれた「ここは無理だから」(p 18)の「ここ」が指す事柄は不明。

その次の段落の「そこ」(p 18)の指す事柄も不明。

もしかして、「とつても」は〈とても〉の強調か。

こんなふうに一々指摘していたら、きりがない。

「衝撃」の原因は、チャット GPT による「イラスト理解」(p 19)だ。

しかし、「イラスト理解」は読解力だろうか。思考力や判断力などではないのか。もしかしたら、思考力などは「シン読解力」の一部なのかもしれない。

＊

このような進歩は、AI 研究の進展だけではなく、「教師データ」があつてこそ達成されます。

(p 19)

＊

「このような」は〈「イラスト理解」「のよう」〉と解釈しておく。

＊

[図 1-1 大学入試センター試験英語リスニング問題]

2 人が話し合っています（実際の問題では、以下、英語）。

「新しいアニメのキャラクターを考案しないと」

「そうだね、野菜なんてどうかな」

「悪くない。でも、より強い印象を与えるために翼をつけよう」

この会話の結果できたキャラクターを次の 4 つから選びなさい。

(p 20)

\*

そして、イラストが並ぶ。下手な絵だ。

\*

「教師データ」とは、文字通り、AI の先生役となるデータのことです。

(P21)

\*

「文字通り」は意味不明。

「教師」と「先生」の関係が不明。「教師データ」と「先生役となるデータ」が同じなら、〈「教師」＝「先生役となる」〉ということか。だったら、日本語になっていない。

「AI の先生役」は、勿論、意味不明。

次の文で少しだけ説明してあるが、わからない。

\*

たとえば、写真とそこに写っているものの名称のペア（例：りんごが写った写真と、「りんご」という名称）をたくさん集めたものが教師データになります。

(p 21)

\*

「写真とそこに写っているもの」の例が「りんごが写った写真」だとすると、「りんごが写った写真」は〈「写真とそこに写っている」「りんご」〉と記すべきだろう。この程度の相違は無視してよいのか。よいとしたら、なぜか？

なぜ、「たくさん集めたもの」なのか。一個の「ペア」は「データ」にならないのか？ ならないとしたら、何個から「データ」になるのか。

この「なります」は接客商売用語か。例えば、できたコーヒーを置きながら、〈これがコーヒーになります〉というときの〈なります〉と同じ意味か？ つまり、「教師データになります」は〈「教師データ」です〉と同じ意味か。

\*

ですから、AI の精度向上のカギとなるのは教師データの質と量、さらにその膨大なデータを学習するための計算資源、つまり「コンピュータの性能と台数」です。

(p 21)

＊

「カギ」は「事を解決するのに必要な要素」（『広辞苑』「かぎ」⑤）という意味とは、少し違うようだ。

「さらに」は唐突。

「計算資源」は専門用語だから、まったく解説になっていない。この「資源」は「供給源」（『リーダーズ英和辞典』「resource」）という意味らしい。

〈「教師データの質と量」＝「計算資源」＝「コンピューターの性能と台数」〉とまとめていいのか？ いいとしたら、私には何のことか、さっぱりわからない。

この次も理解できない。

＊

医療現場では、放射線科医の不足に常に悩まされていますから、AIを開発するインセンティブが医師の側にも、医療機器メーカーにも、AI研究者にもあるので、莫大な投資が行われてきました。つまり、画像認識の精度向上は経済学的に「自然」なことだったので

（p 21）

＊

「インセンティブ」の意味は「激励、刺激、誘因、動機；奨励金、報奨、発奮材料、励みとなるもの；《俗》コカイン」（『リーダーズ英和辞典』「incentive」）のうちのどれかな。どれでもないのかもしれない。前後関係から意味を推測することさえ、私にはできない。

「奨励金」と「投資」の違いを、私は知らない。

「経済学的に」は〈経済的に〉の間違いではないのか。「経済的に、節約して；経済（学）的には」（『リーダーズ英和辞典』「economically」）の混同か。留学して日本語を忘れたのかもね。

「自然」は止せよ。ほぼ嘘だ。鉤で括って格好を付けたのは、いけないことだと承知の上だよね。真意は〈好都合〉あたりだろう。

（GOTO 『夏目漱石を読むという虚栄』2200 不自然な「自然」）

＊

でも、イラストを「読画」してテキスト化するインセンティブが、いったい誰にあるのでしょうか。

（p 21）

＊

「読画」は造語だろう。困るよ。

この「インセンティブ」の意味は、私には想像すらできない。だから、「誰にあるというのでしょうか」と問われても戸惑うしかない。

＊

さきほどのリスニングの問題を正答するには、まず、この4つのキャラクターがそれぞれ「りんご」、「にんじん」、「きゅうり」、「ぶどう」を基にしていることを認識した上で、野菜か果物かを判断し、それらに翼が生えているかどうかを区別しなければなりません。

(p 21)

＊

「問題を正答する」は、〈「問題」に「正答する」〉が普通だろう。しかし、AIの校閲は見逃すのかもしれない。

「判断し」は、おかしい。「野菜か果物か」は、生物学の知識がないと解けない。

「翼」は「生えて」いない。「つけよう」と言ったのだから、〈ついて〉いるのだよ。

＊

2001年代の私は「そんなの絶対無理。そんな教師データを数十万規模で構築しようという酔狂な人があるわけがない。いたとしても誰も資金提供しない」と思っていました。

……でも、いたんですね。

2024年5月に公開されたチャット GPT-4oはこの問題をさらっと解いて見せました。しかも、こんな解説つきで。

(p21～22)

＊

「酔狂な人」に「資金提供」すると「この問題」が「さらっと」解けるの？ 違うよね。でも、どんなことが起きたのか、私には想像できない。

「いたんですね」って、誰が？ 「酔狂な人」と「資金提供」する人の、どっち？ どっちもだったら、舌足らずだ。

〈「チャット GPT-4o」が「教師データを数十万規模で構築」した〉といったような記述はない。

「解いて見せました」はチャット GPT を擬人化した表現だろう。では、さっきの「いたんですね」の主語には、チャット GPT も含まれるのかな。

## 8

### 「第1章 チャット GPT の衝撃」(2)

チャット GPT は東大に入れるか？

私には理解できっこない専門的な話が続けると、不意に砕けた感じで意味不明の作文が始まる。

＊

バージョンアップされるたびにチャット GPT は格段に賢くなっています。

(P26)

＊

「バージョンアップ」とは「既存のものを改訂・改良すること」（『広辞苑』「バージョン・アップ」）だから、「賢くなって」と重複するようだ。したがって、この文の主眼は「格段」だろう。しかし、新井の抱える問題は、〈AIは東大受験に受かるか？〉ということだ。新旧バージョンの比較ではない。つまり、100点満点で10点しか取れなかったのが50点取れるようになったら「格段に」向上していることになるが、90点取れなければ合格しないとしたら、サクラチル。89点が90点になれば、たった1点の向上でも、サクラサク。

＊

チャット GPT の進化ぶりには驚かされるばかりですが、では、チャット GPT はじめ生成 AI は、いよいよ東大に入れる AI になったのでしょうか？

（p 27）

＊

「驚かされる」には尊崇の念が籠っている。

新井は「格段」という言葉によって何かを隠している。その何かとは、〈新しいチャットは新井の設定したラインを突破した〉といった思いだろう。

「賢く」は〈賢そうに〉が適当だろう。だが、そうでもないのかもしれない。

＊

アニミズム（精霊崇拜）に基づき、精霊の威力を畏怖する気持ちに由来したといわれる。畏怖から畏敬へ、さらに神などの畏敬すべき能力を表わすようになり、平安時代には資質や能力がすぐれていることをいうようにもなった。

（『日本国語大辞典』「賢い」語誌）

＊

チャット GPT はシン精霊に昇格した。そうした呪術めいた気分が、「賢く」という言葉によって洩れてしまった。そのように疑われる。

「たびに」に「います」は照応しない。この文は、次の二文を圧縮したものだろう。

〈「バージョンアップされるたびにチャット GPT は格段に」向上してきました。現在では精霊のように「賢くなっています」〉

## 9 『新三種の神器』を研究者はもう手放せない

AI は、誰にとってもシン精霊になりつつある。

ある人が〈チャットに占ってもらったら、本物の占い師に占ってもらったときと同じことを告げたので、驚いた〉と語った。同じことでなければ、その占い師の方がおかしいよね。

＊

いまや AI は国際的に活動する研究者にとって欠かせない存在です。

(p 31)

＊

いまや AI は国際的に活動しない幼児にとっても欠かせない。

「存在」は意味不明。

＊

哲学における最も根本的な概念。それゆえ十全に定義することはできない。

(『ブリタニカ国際大百科事典』「存在」)

＊

AI は人工知能だ。機械であれ、動物であれ、それに知能や機能などが存在するとか、しないとか、そんなことが言えるのか？

＊

研究者の間には、「三種の神器」というスラングがあります。英語を母語としない研究者が、英語論文を書く上で欠かせない 3 つの AI を指す言葉です。

(p 31～32)

＊

「三種の神器」は「スラング」としても怪しい。

＊

皇位の標識として歴代の天皇が受け継いできたという三つの宝物。

(『広辞苑』「三種の神器」)

＊

「三種の神器」は「標識」であって、「テレビ・洗濯機・電気冷蔵庫」(『広辞苑』「三種の神器」) のような実用品ではない。

言うまでもなく、テレビとテレビ番組は違う。テレビが電子計算機に相当し、テレビ番組が AI に相当する。

もっとはっきりとした譬え話をしよう。

『白雪姫』の鏡を「神器」と呼ぶとしよう。この鏡が電子計算機に相当する。そして、AI は、ディズニーのアニメに出ている鏡の精霊に相当する。あの精霊は存在するともしないとも言えない。

「スラング」には、〈秘技〉という含意がありそうだ。つまり、「三種の神器」は隠語みたいなものなのだが、「三種の神器」の利用が秘密になっているのだろう。

「母語としない」の真意は〈使いこなせない〉だろう。

「英語を母語としない研究者」の全員にとって「英語論文を書く上で欠かせない 3 つの AI」があるのかな？

「英語を母語としない研究者」は日本語も不得手らしい。

＊



時期や分野によって「三種」のラインナップは変わったりもしますが、「DeepL（ディープ L）」と「Grammarly（グラマリー）」の2つは外せないというのが研究者の一致した見方でしょう。

（p 32）

＊

「変ったりもします」は〈変わることがあります〉が適当だろう。

＊

「同様のことが他にあるのを暗示しつつ、例示する。「泣い—しては駄目」

（『広辞苑』「たり」②）

＊

「泣い—」どうしたりするのか。〈拗ねたり〉かな？

「変わったり」どうなったりするのか。私には想像できない。

「も」は処置なし。

＊

（それ一つではないの意から）意味を和らげる。いろは文庫「無理にとめ一致しますまい」。「一時は辛く—あろうが、必ず幸せになれる」

（『広辞苑』「も」②—⑩）

＊

〈「辛く—」苦しくも〉か。

〈「変わったりも」変わらなかったりも〉じゃないよね。

「3つ」が「2つ」って、どういうこと？ 〈4つ〉もあり？

「見方」は意味不明。

＊

①見る方法。見よう。

②見て考える方法。考え方。見解。「物の—」

（『広辞苑』「見方」）

＊

「見解」が妥当か。ううむ。

＊

物事に対する見かたや考え方、意見。「—を異にする」「—の相違」

（『広辞苑』「見解」）

＊

新井は「意見」という言葉が嫌いなのかもしれない。

＊

最初のうちは、相手が目上・目下に関わらず使用されていたが、訓戒の意が強くなり、次第に目上から目下へと用法が限定されてきた。

(『日本国語大辞典』「意見」語誌(3))

＊

御意見番と思われたくないのかもね。

## 10 チャット GPT は平気でウソをつく

「平気」って、どういうこと？ 「ウソ」はカタカナだけど、何か裏の意味でもあるのかな？ 新井は AI を擬人化している。不愉快だ。

擬人化は「物語の読み方」(p4) と関係があるのだろうか。

＊

「夕だちだ。」

草はらに いた うさぎの 子は、大いそぎで、木の 下に かけこみました。

2 「夕だちだ。」と いったのは、だれですか。

3 うさぎの 子は、どこに かけこみましたか。

(『くもんの小学1年生 文しょうだい総復習ドリル こくごとさんすう』「ものがたりのよみとり①」から)

＊

「ものがたりのよみとり」をしなければならないのは、問2だ。問3は、説明文の、つまり、普通の文章の読み取り方で正答できる。

問2に正答できると、何か困ったことになるのだろうか。そうではなさそうだ。「自己流で身につけた「物語の読み方」」(p4) と書いてあった。「くもん」流とは違うようだ。

問2を解くには想像力が必要だ。「だれ」は擬人化だから。しかし、想像力が邪魔になるとは考えられない。説明文でさえ、少し難しくなれば想像力が必要になる。邪魔になるとしたら、働くのは想像力ではなく、創造力だろう。

問2の場合、「自己流」の「物語」を拵えてしまえば答えようがない。「だれ」の候補は、いくらでも考えられるからだ。

創造的「物語の読み方」は、たとえば「オズの国」と「ムーミン谷」の質を区別しないような読み方だ。

新井流の「物語の読み方」は、AI の擬人化と関係がありそう。新井の想定する読者は銘々が創造的「自己流で身につけた「物語の読み方」」をしていて、そして、彼らに媚びるために新井は奇矯な作文を楽しんでいるのかもしれない。

＊

チャット GPT が目指しているのは、正しい情報を基にした文章を生成することではなく、あたかも人間が話したり作文したりしているかのような「自然な言語生成」です。

(p43)

＊

また擬人化だ。この文もチャット GPT が拵えたのだろうか。

「自然な言語生成」に鉤が付いている理由を、私は想像できない。「自然な」は〈「自然な」ように人間には思える〉などと補うべきだ。

＊

その目標とは、AI 研究者が長らく目指していた「流暢に言語を操る」ことでした。

(p 44)

＊

前の「目指して」の主語も「AI 研究者」だよね。だったら、いいんだけど、私には自信がない。

「操る」は不適當だ。〈「AI 研究者」が「操る」〉と誤読できてしまう。

新井は自分が「流暢に言語を操る」ように見せかけている。

## 11 AI を使いこなせる人材になる

「AI を使いこなせる人材になる」その前に、AI からであれ、何からであれ、誰からであれ、入手した情報を過信しない人間になることが先だ。そのためには直感を磨かねばならない。勿論、直感を疑う必要はある。しかし、直感や印象や感覚などが働かない「人材」なんか、ロボットと変わりが無い。

＊

チャット GPT などの生成 AI の出力にはウソ（ハルシネーション）が含まれます。

(p 73)

＊

やっと「ウソ」の意味が記される。だが、「ハルシネーション」の訳語が示されていない。辞書を見ても、私は迷う。

＊

1 幻覚.→ILLUSION 類語

2 (幻覚によって見える) 幻影,幻.

3 誤った考え[信仰,信念,印象],思い違い,錯覚,妄想,迷い

(『ランダムハウス英和大辞典』「hallucination」)

＊

インスピレーションと、どう違うのだろう。

＊

チャット GPT を使いこなすために必要になるスキルとはなにか？

それが、これから本書でお話する「シン読解力」です。

(p 74～75)

＊

「チャット GPT を使いこなすために」限らず、また、「シン」がどうであれ、まともな読解力は、日常生活で必要だ。

＊

チャット GPT とタグを組んで生産性を上げるには、少なくともチャット GPT と遜色のない読み書きスキルが必要です。

(p 75)

＊

また、意味不明だ。「チャット GPT とタグを組んで」って、擬人化だね。実際にはどういう作業だろう。「少なくとも」とあるが、多い少ないの話ではなかろう。「チャット GPT と遜色のない」は〈「チャット GPT と」比べて「遜色のない」〉と補ってもいいかな。読解力の話が「読み書き」になったよ。なお、本書では、作文力の話は出てこない。

＊

私たちはチャット GPT の出力を、まず読んで理解できなければなりません。「なんかいい感じに書いてあるから OK」ではダメです。さらに出力を読んで、理解するだけでも不十分です。

なにしろ、相手は呼吸をするようにウソをつきますから、ファクトチェックをする必要があります。

(p 75)

＊

「出力」は専門用語で、〈出力された情報〉のことらしい。

新井の作文も「なんかいい感じに書いてある」が、読者は眉に唾を付けよう。

「さらに」で話が飛躍する。本書の主題は「理解するだけ」のはずだ。

「ファクトチェック」なんか、二の次、三の次だよ。本気で言うのなら、宗教やイデオロギーなどの「ファクトチェック」を済ませてからにしてくれ。

わかったつもりになることは、「相手」が誰であれ、何であれ、不可避だ。警戒すべきなのは、わかったふりだ。「必要」なのは、この違いを自覚することだ。

曖昧と難解は違う。

例えば、「ウソ」の意味は曖昧だから、ファクトチェックはできない。一方、「ハルシネーション」が専門用語なら、素人には難解なだけで、ファクトチェックはできる。曖昧と難解の区別ができないのなら、何を読んでも理解できない。

## 12 「第2章 「シン読解力」の発見

本当に、私には理解できないのだ。

＊

「AI を賢くしている場合じゃない。AI がホワイトカラーの仕事の半分を代替する前に、子どもたちのほうを賢くしなくては！」

危機感を抱いた私は、2016 年から「リーディングスキルテスト（RST）」というテストの開発を始めました。

（p 80）

＊

現在、新井は「AI を賢くして」いないのか？

AI がブルーカラーの「仕事」の半分以上を「代替する」のは構わないのか？

「危機感」の内容は〈「AI がホワイトカラーの仕事の半分を代替する」かもしれないという予感〉だろうが、飛躍しているから読みづらい。

なぜ、「前」でなければならないのか。後からでは駄目か？

AI が「子どもたちのほう」を「賢く」することはできないのか？

「2016 年から」という話には面食らう。ただの私事だろう。「テストの開発」の歴史と新井個人の人生の物語がごっちゃになっている。公私混同だ。複数の物語を同時に語ろうとして失敗すると、悪文ができあがる。私事が重要なら、「危機感を抱いた」時期についても記すべきだ。

さて、RST の例題を読もう。

＊

Q 次の文を読みなさい。

幕府は、1639 年、ポルトガル人を追放し、大名には沿岸の警備を命じた。

上記の文が表す内容と以下の文が表す内容は同じか。「同じである」「異なる」のうちから答えなさい。

1639 年、ポルトガル人は追放され、幕府は大名から沿岸の警備を命じられた。

（p 81）

＊

この問題は、知識問題であり、読解力の問題ではない。なぜなら、「幕府」と「大名」の上下関係を知っていれば、第二文に含まれた「幕府は大名から沿岸の警備を命じられた」という部分が間違いであることに気づくからだ。これと第一文が「同じである」とは考えにくい。二つの文を読み比べる場合、「異なる」という確信があるから、間違えにくい。

＊

やさしい問題だと予想していましたが、中学生の正答率は 57%（調査数 857 名）にとどまりました。二択問題ですから、2 つの文の違いを理解した上で正解した中学生の割合は 57%よりさらに低いと予想できます。

(p81)

＊

最初の「予想」は外れたのに、次の「予想」は外れないのか？ なぜ？

「2つの文の違い」について、解説がない。

「2つの文の違いを理解した」のかどうか、どうやって調べるのか。

「2つの文の違いを理解」しないで「正解した中学生」の全員は、まぐれ当たりか？

「違い」を誤解して「正解した中学生」だっているのかもしれない。

〈なぜ誤答したか〉を調べるべきではないのか。

＊

自己完結的な文書とは、「新しく使う用語を導入する際に、定義と例が書かれており、すべての主張にその根拠が書かれている」、そして「解釈がひとつ（一意）に定まる」ように書かれた文書です。代表的なのが教科書や辞書や事典、新聞記事などの記述です。

(p 82)

＊

「鉤」で括った部分の出典が記されていない。

「代表的なのが」以下は怪しい。

＊

他に依存することなく、それ自身だけでまとまっていること。他と関連をもたず成り立っていること。

(『広辞苑』「自己完結」)

＊

こういう辞書の説明が「自己完結的」って、どういうこと？

＊

相手に情報や意思を伝え、これに了解を求めるといふより、発信人ないし発信集団がこれを表現すること自体を目的とし、そのことによって自己（発信人）の心理的緊張を解消し満足させるようなコミュニケーションをさす。意思伝達を目指す道具的、手段的コミュニケーションに対し、表出的コミュニケーションといってもよい。

(『ブリタニカ国際大百科事典』「自己完結的コミュニケーション」)

＊

『夏目漱石を読むという虚栄』 1250 自己完結的〕参照。

「シン読解力」という造語は「自己完結的」だよね。

＊

一方で、RST は文学作品や評論をテストの対象としません。文学は「知識や情報を伝達する目的で書かれた自己完結的な文書」ではないからです。太宰治の『走れメロス』が、知識を伝達する目的で書かれた文書だと考える人はどこにもいないと思います。

(P82)

なぜ、『走れメロス』を持ち出すのだろう。こんなパクリの駄作を名作とでも思っているのか。

『夏目漱石を読むという虚栄』 3 2 5 1 パシリ・メロス] 参照。

### 13 「読める」は才能ではなくスキルである

えっ？

わが目を疑う。

「読める」が〈読むことができる〉という意味なら、「才能」ではないとしても、〈能力〉だろう。「スキル」が〈技術〉という意味なら、〈読む技術に熟達すれば読む能力が発達する〉と、新井は表現したつもりだろう。だったら、そう書けばいい。なぜ、書かない？

「才能」には、〈天賦の才〉という含意があるのかもしれない。だったら、そう書けばいい。”gift”のことか。

＊

もうひとつ、シン読解力が必要な理由があります。ホワイトカラーの仕事の仕方やメディアの在り方がこの 20 年で大きく変わったからです。

(p 84)

＊

「ホワイトカラーの仕事」の多くは、そもそも、不要なのではないか？

そもそも、「ホワイトカラー」って、何？ 「サラリーマンは気楽な稼業と来たもんだ」って、こりやまた失礼しました。

＊

それは、旧中間層にしばしばみられる地域共同意識と異質であると同時に、権力エリートや大企業主の意識とも明白な断絶を示す。これはホワイトカラー層の量的拡大がその階層分化を生み、相対的にその地位の低下した者が多くなったことの端的な現れであり、ホワイトカラーを中心とする新中間層の分解化がしばしば指摘されるゆえんである。

(『ブリタニカ国際百科大事典』「ホワイトカラー」)

＊

「それ」は「市民の権利意識」(同前) などだが、こうした「意識」は知識に留まりがちのようだ。

「24 時間働けますか、ビジネスマン？」って、過労死は自己責任……だよね～

＊

企業の幹部、政治家、官僚など、中・上層階級に属し、権利・財力をもつ者が、その地位や権限を利用し、おもに経済的利得を目的として行われる。経済事犯、詐欺、横領、背任、贈収賄、各種脱税などの罪種が多い。適法な企業活動や行政執行の過程で行われるた

め、適法・違法の判断をつけにくく、しかも本人は企業のためという大義名分をもち、あるいは、贈答社会のなかでの感覚の麻痺（まひ）からほとんど罪悪感をもたないので、この種の行為は繰り返し行われやすい。（中略）刑事司法における取り扱いも寛大で、この種の犯罪への執行猶予率の高さ（たとえば収賄罪では90%以上）がそれを示している。これは、裁判官が同じ階層に属すること、行為者が財力にものをいわせて練達な弁護士を雇えることなどが理由といわれる。

（『日本大百科全書（ニッポニカ）』「ホワイトカラー犯罪」）

＊

「メディア」は曖昧。「特に、マス・コミュニケーションの媒体」（『広辞苑』「メディア」）という意味らしい。だが、「マス・メディアが支配力を持っている政治・社会」（『広辞苑』「メディアクラシー」）は安全だろうか？ 〈双方向メディア〉は除外か？

＊

私は「シン読解力」が高い人ってどんな人ですか？ と聞かれると（後略）

（p 86）

＊

次に挙げられる人名を、私は書き写したくない。

少し前に、「RST が測る力を「シン読解力と呼ぶ」（p83）と書いてあった。ということはだね、ここで紹介されている「シン読解力」が高い人は、当然、RST を受けているよね。受けたの？ そして、満点を取ったの？

新井は呼吸をするようにウソをつくらしい。

＊

（前略）を読破するには、そもそも基盤となる「シン読解力」が不可欠なはずです。

（p 88）

＊

何を「読破する」かなんて、どうでもいい。

そもそも、「読破」が意味不明。

＊

（難解な、または大部の書物や書類を）すべて読み通すこと。

（『広辞苑』「読破」）

＊

「読み通す」とは？

＊

始めから終わりまでひととおり読みとおすこと。「全体をざっと一した印象」

（『広辞苑』「通読」）

＊

「印象」だよね。



はい。論破！

理解できたら、十分なのか？

論語読みの論語知らず。

実行できないようなことは、理解できなくていい。そもそも、知らなくていい。知らない方が楽でいい。

生兵法は大怪我の基。

知ってはいるけど、分かっていない。分かっちゃいるけど、できない。やらない。やれることは他人の成績の評価ぐらい。そんな「ホワイトカラー」にはこの世からさっさと去ってもらいたいよ。

いやはや。

〈理解〉とは、そもそも、何なのか。

そもそも、そもそも……

もぞもぞ、もぞもぞ……

#### 14 リーディングスキルテストとは何か？

##### ①係り受け解析

「スラング」(p31) だらけのようだ。

「単純計算すると、30分弱で終わるテストですが」(p90) に含まれた「単純計算」は意味不明だ。また、「終わるテスト」や「1時限の授業時間中にテストが終わるよう設計されています」(p90) という文に含まれた「終わる」が意味不明だ。

「文の構造を読み解くこと」(p91) は意味不明だ。〈構造を読む〉って、どういうこと？

＊

この問題群では、提示された文に関する知識や親密度、好き嫌いなどに左右されない、頑健な文章構造読解の力を測ります。

(p91)

＊

「この問題群」は「①係り受け解析」(p90) と呼ばれる。

「問題群」の「群」は無視しよう。だが、〈「問題」「では」「測ります」〉は、意味不明だ。この文の「文章構造」なるものは、どうなっているのだろう。

「知識や親密度、好き嫌いなどに左右されない」なんてことは、あり得ない。「左右されない」という証明はできているのか？ 新井らは精神について、ほとんど何も知らないようだ。ちょっと不気味だ。「例題」(p81) に関する私の指摘を参照してくれ。

「頑健な」は、どの言葉を修飾するのだろう。ううん。分からん。「構造」かな？ でも、「文章構造」の意味が分からないからなあ。

＊

「係り受け」とは、文中の「主語と述語」、「修飾語と被修飾語」などの関係性を指します。

(p 91)

＊

「関係性」って、近頃、よく見たり聞いたりするけど、単なる〈関係〉と、どう違うの？ 無用の「性」は「スラング」だよね？

＊

構造上、単文・重文・複文の 3 種に分け、また、機能上、平叙文・疑問文・命令文・感嘆文の 4 種に分ける。

(『広辞苑』「文」⑤)

＊

これは「文」の構造の説明であって、「文章構造」の説明ではない。

＊

文よりも大きい言語単位で、通常は複数の文から構成されるもの。それ自身完結し統一ある思想・感情を伝達する」

(『広辞苑』「文章」③)

＊

「自己完結的」(p82) という「スラング」は、この説明の誤読によって作られたのかもしれない。

＊

問題 01 は、「係り受け解析」の問題の一例です。

(p 91)

＊

これは割と簡単な問題なのだが、「正答率は 62・7%」(p 91～92) だそう。私の普段からの感想だが、近代社会において約三分の一の人は、「シン読解力」が何だとしても、とにかく日常生活を営むのに十分なだけの読解力は身に付かないのではなかろうか。

＊

間違え続けると、「おじいさんは山にしばかりに、おばあさんは川へせんたくにいきました」という文を読んで、「川へいったのは（ ）です」にあてはまる言葉を探すような、とてもやさしい問題が出題されます。

(p 93)

＊

『桃太郎』を知っているか知らないかで、正答率に違いがあるはずだ。

「山に」と「川へ」の「に」と「へ」の混用は、よくある。

男は、「山に」において芝刈りをするために、山へ行く。

女は、川において洗濯をするために、「川へ」行く。

〈山に着いた〉が正しいが、〈山へ着いた〉という方言はある。

「しばかりに」は〈「しばかり」をし「に」〉が正しい。「せんたくに」は〈「せんたく」をし「に」〉が正しい。しかし、口調の良さを優先させる場合、文法的に正しくなくても構わない。

「あてはまる」の前には〈の空欄〉などが必要だ。

「とてもやさしい問題」なら、「おばあさんは（ ）へせんたくにいきました」だよ。記憶できないと読解はできない。ただし、幼児に『論語』を暗誦させるのは過酷だ。

この問題文は、七面倒くさいのだよ。

「問題 02」にも知識問題の一面がある。

＊

アミラーゼという酵素はグルコースがつながってできたデンプンを分解するが、同じグルコースからできていても、形が違うセルロースは分解できない。

(略)

セルロースは（ ）と形が違う。

＊

読解が不十分でも、「アミラーゼ」と「グルコース」と「デンプン」と「セルロース」に関する知識があれば、迷わない。

アミラーゼは「澱粉・アミロース・グリコーゲンなどを加水分解してマルトースやグルコースなどを生じる」(『広辞苑』「アミラーゼ」)という知識と、グルコースは「澱粉・グリコーゲン・セルロース・蔗糖・乳糖などの構成成分をなす」(『広辞苑』「葡萄糖」)という知識と、セルロースは「グルコースが結合して生じた鎖状高分子化合物」(『広辞苑』「セルロース」)という知識があれば、読解力はほとんど不要だ。

問題文の「分解できない」の主語が分かっても、以上の知識がないと、迷う。

＊

この問題の正解は、①デンプンですが、なぜか、「アミラーゼ」を選ぶ人が多いことがデータでわかっています。

(p 93)

＊

「なぜか」って、質問してみなさいよ。怠け者め。

返ってくる答えの多くは、〈化学が苦手だから、問題文を読みたくなかった〉だろう。〈片仮名、嫌い〉という返事もありそうだ。

この「アミラーゼ問題」(p 93)は「係り受け解析」(p91)だから、「知識や親密度、好き嫌いなどに左右されない」(p91)という条件がある。だが、実際には「左右され」るはずだ。

## 14 リーディングスキルテストとは何か？

### ②照応解決

「照応」は意味不明。「主語・述語の一」（『角川類語新辞典』分類 859 文芸用語（文芸に関する用語））という用例は見つけたが、具体例は記されていない。

＊

「照応解決」問題では、省略されている主語や述語を読み解く力を試します。

（p 95）

＊

「読み解く」は意味不明。〈推し量る〉などが適当か。

「解決」も意味不明だ。①「係り受け解析」の「解析」とは違うのだろうが、違いが分からない。

＊

提示文の内容について、学校で習ったかどうかは、RST の能力値に影響しないことがデータからもわかっています。

（p 96）

＊

〈「学校で習った」ら、これくらいのことは、これくらいの人が、一生涯、覚えている〉という「データ」はあるのか？

## 14 リーディングスキルテストとは何か？

### ③同義文判定

AI がどうのこうのなんて、どうだっていい。普通の読解力が、私には足りない。いろんな取扱説明書を読んでも、完全には理解できない。役所から届く書類となると、もう読む気にもなれない。

例えば、ルービック・キューブは、解説書に書かれている通りに作業すると、完成する。しかし、私の場合、自分が何をしているのか、分からない。キューブの見えない側の動きが想像できないのだ。数秒で完成させてしまうような人の頭の中は、どうなっているのだろう。

本当に理解するということは、どういうことか。私の考えでは、凡庸な自分に向かって、聡明な自分が噛み砕いて説明してやることだ。つまり、分かりやすい「同義文」を作ることだ。だから、悪文を書く人に読解力があるとは、私にはとても思えない。

さて、「同義文」という語句を、私は見たことがない。

「同義文判定」の問題が提示されていない。

では、私が作ってみよう。

問題 「情に棹差せば流される」と同じ意味の文を次の中から選べ。  
「他人の感情を気遣っていると、自分の足元をすくわれる」  
「人情に従えばその場の状況に流されて足もとをすくわれる」  
「感情に走って世間を渡れば思わぬところに行ってしまう」  
「人情だけを大切に考えると他人の気持ちに引きずられてしまう」  
「感情に身をゆだねると物事が流されてしまう」

GOTO 『夏目漱石を読むという虚栄』〔4 3 1 2 「情<sup>じょう</sup>に棹<sup>きお</sup>差せば流される」〕

＊

ここまでの3つの問題分野は、文の意味を深く考えなくても、説明文の文体に慣れており、語彙量が十分にあれば、ある程度解ける問題群です。

(p 97)

＊

〈「文の意味を深く考え」る〉は意味不明。

「説明文の文体」は意味不明。

＊

①文章のスタイル。語彙・語法・修辞など、いかにもその作者らしい文章表現上の特色。樋口一葉、みづの上日記「おのおのの一心々の書きさまいとをかしからんとおもふ」。「独自の一を持っている」

②文章の様式。国文体・漢文体・洋文体、または書簡体・叙事体・議論体など。

(『広辞苑』「文体」)

＊

新井は国語辞典を引かないらしい。

「語彙量」は「語彙」だけで「十分」ではないのか。いや、そうでもないか。

＊

一つの言語の、あるいはその中の特定の範囲についての、単語の集合。また、ある範囲の単語を集めて一定の順序に並べた書物。「日本語の一」「親族一」「近松一」

(『広辞苑』「語彙」)

＊

「語彙量が十分」とは、どの程度か。「データ」はある？

＊

ある言語で基本となる単語の総体。それだけで日常の最低限の用を足すことができる単語の総体。

(『広辞苑』「基礎語彙」)

＊

新井は、「語彙量」と「シン読解力」の関係について調べたのか。

「問題分野」と「問題群」の違いは？ ええっと、分かるかな。分かるかもしれない。

## 14 リーディングスキルテストとは何か？

### ④推論

なぜ、問題 04 (p97) が「推論」と呼ばれるのか、私には分からない。

正答は、「森林が失われた」という情報の一部が「まちがっている」というものだ。

＊

全体正答率は 49・8%でしたが、高校生の正答率が、小中学生より有意に低いことが目についた問題です。教員の正答率が高校生よりさらに低い 34・5%にとどまりましたが、その理由はわかりません。

ちなみに、チャット GTP-4o に尋ねたところ、さんざんもっともらしい解説をした挙句、「正しい」が正解だと答えました。

(p 98)

＊

「有意」の根拠は示されていない。

「その理由」をチャット GTP-4o に尋ねたら、いかが？

「その理由」は、容易に想像できる。〈環境問題について悲観的に考える人は知的だ〉と洗脳されているからだろう。だったら、年を取るほど、洗脳の度合いが高くなり、正答率が下がることになる。

## 14 リーディングスキルテストとは何か？

### ⑤イメージ同定

「同定」の意味が分からない。

＊

①同一であることを見きわめること。

②自然科学で、既存の分類体系の中に位置づけ、どれと同じであることを認定すること。

(『広辞苑』「同定」)

＊

問題 05 (p 99) 「メジャーリーグ問題」の選択肢は円グラフだが、そのなかにちゃんと数字が記入してある。その数字を見るだけで解答できる。「イメージ」の意味が分からない。

あまりにも簡単な問題なので、私は却って自信がなくなり、何度も問題文を読み返した。

＊

「メジャーリーグ問題」は、「偏差値 60」くらいの方は正答率 50%、「偏差値 70」くらいになると 90%以上の正答率になる問題でした。「イメージ同定」の能力が「中の上」の人と「上」の人を見分けるのに適した良い問題だったのです。

(p101)

＊

私の場合、「良い問題」は簡単に正答できるのに、新井の作文は理解できない。本書を  
すらすらと読めちゃう人は「偏差値 70」以上なのだろうか。

怒りながら笑っちゃいそう。

「偏差値」って何？

＊

知能検査の結果は、従来、精神年齢（MA）や知能指数（IQ）で表示されていたが、成人用知能検査が開発されたところから、知能偏差値が多く用いられるようになった。」知能の発達曲線は 10 歳代の後半から緩やかになり、中・高年になると横ばいもしくは低下を示すので、各年齢ごとの平均値や分布に基づいて、個人の集団内の位置を示す知能偏差値のほうが、精神年齢や知能指数よりも合理的で便利であることが認められたからである。

その後やがて偏差値による表示法は学力検査にも適用されるようになった。

（中略）

ところが、偏差値データによる「輪切り選抜」や大学の序列化といった弊害がしばしば指摘されたため、文部省（現文部科学省）は共通一次試験にかわるセンター試験の実施

（1990）、業者による統一テストの廃止（1993）など、評価尺度の多元化を進めるに至った。このように、いわゆる「偏差値」問題として、学力偏差値が厳しく批判され、今日の教育のゆがみを引き起こした原因の一つのような言い方がされている。

（中略）

偏差値自体は個人が集団内でしめている相対的位置を表示するだけのものであり、要はその活用の仕方であって、偏差値の誤った用い方をしたことのほうに責任が問われるべきである。このこととは別に、偏差値は得点が正規分布することを前提として考察されたものである。ところが、学業成績（学力）は、教師が優れた指導をすれば高得点者が多くなり、正規分布とはならないはずである。学力偏差値を用いる際にはこの点に留意する必要がある。逆に、本来、正規分布になるはずの得点がそうならなかった場合には、分布を正規分布の形に修正して偏差値を求めることが望ましい。

（『日本大百科全書（ニッポニカ）「偏差値」』

＊

「MA」や「IQ」や「正規分布」についても、本当は調べなくちゃ。

いつか、またね。いや、またはないかな。

(14⑤終)

#### 14 リーディングスキルテストとは何か？

##### ⑥具体例同定（1）

問題が悪い。

＊

Q 次の文を読みなさい。

2 で割り切れる数を偶数という。そうでない数を奇数という。

偶数をすべて選びなさい。

① 8      ②110      ③65      ④0

（p 102）

＊

「数」は怪しい。

「割り切れる」って、どういうこと？

$$65 \div 2 = 32.5$$

ほら、割り切れた。

冗談はさておき。

$$0 \div 2 = 0$$

ふむふむ。

いやいや、実は、かなり難しいんだよね、これ。

＊

「0 って偶数なの!？」と驚かれた方は少なくないと思います。

偶数・奇数の定義は、すべての小学 5 年生の教科書に、ほぼこの通りに書かれています。

（p 102）

＊

「奇数の定義」は書かれていないよ。

「定義」は、かなり難しい。「定義」を定義できるか？

〈「ほぼこの通り」の「定義」〉って何？

＊

①二、四、六、八…のような、二で割り切れる自然数。

②二で割り切れる整数。すなわち、 $0, \pm 2, \pm 4 \dots$ 。

（『日本国語大辞典』「偶数」）

＊

「自然数」に〈0〉は含まれるかな？

数直線上に〈0〉の位置が見えてくるのは、負数を知ってからだ。

奇数  $-1 =$  偶数       $1 - 1 = 0$       よって、0 は偶数

分かるけど、屁理屈みたいな気がするよね。



ゼロとは「数えるべきものが一つもないこと」（『広辞苑』「零」）だから、〈割り切れるも割り切れないもない〉と思うのが普通だろう。

こうした普通の印象を処理するのは、大変な仕事だ。理系なら、誰でも知っているはずだけどな。

＊

数 0 は、自然数（0 を自然数に含める流儀もある）、負の整数とともに整数に含まれる数であって、数学的には次のように定義される。いかなる数  $a$  に対しても  $a+x=x+\bar{a}=a$  なる数  $x$  を 0 と書く。

（中略）

数字 0 がもたらした数の表記法における簡便さと、数 0 という数学的な概念の重要さから、ゼロの発見は文化史上に重要な意義をもつ。

（『ブリタニカ国際大百科事典』「ゼロ」）

＊

「小学 5 年生」に「文化史上に重要な意義をもつ」とか何とかを、どうやって教えるの？

＊

教え込まれただけの知識は剥落しやすいことがわかります。

（p 103）

＊

〈0 は偶数だ〉という文は、きちんとした定義として教えられたのではない。いわば常識として「教え込まれただけ」なのだ。

＊

「0」を選ばなかった生徒に理由を聞くと、「たとえば、クッキーが 0 枚だったら、2 人で分けられないように、何もなければ分けようがないから」とか、「0 は特別な数で、奇数でも偶数でもない」と言います。

（p 103）

＊

この「生徒」たちの意見を、新井は尊重しない。

＊

定義をもう一度読んでごらん、と言ってもなかなか意見を変えません。

（p 103）

＊

変な日本語だね。「と言ってもなかなか」の後、〈読みません。読んでも〉が抜けている。校閲は寝ている。

〈なかなか読まない〉という事実を、新井は素直に受け止めたくないのだろう。「生徒」の気持ちを読んでごらん。

＊

興味深いのは、「なぜ、110 は偶数だとわかったの？」と聞くと、「1 の位が偶数の数は偶数だから」と言うところです。

「だったら、0 は偶数じゃないの？」と言うと、困った顔をします。

(p 103)

＊

意地悪婆さん。ガンコちゃんは、どっちだ？

「1 の位が偶数の数は偶数だから」というのは、〈(二桁以上の数で)「1 の位が偶数の数は偶数だから」〉の略だよ。

$$10 \div 2 = 5$$

「興味深い」と書いておきながら、「顔をします」の後、改行なしで、突然、「この現象は」と始まる。どの「現象」だろう。こんな質問をしたら、〈ずっと前から「もう一度読んでごらん」〉って叱られそうだね。

＊

話し手が直前に話題としたことを指す語。

(『明鏡国語辞典』「この」)

＊

新井は、作文をしながら、あの「現象」について思い出し、その「現象」が身近なことにように感じられて、「この」を使ってしまったのだろう。妄想的だね。

＊

この現象は、小学 5 年生から大人まで同じ土俵で大規模調査ができる RST が登場して、初めてその実態が明らかになった、数学に関する「誤概念」だと言えるでしょう。

(p103)

＊

「土俵」とか「登場」とか、意味不明。

「この現象」と「その実態」は、どう違うの？

「誤概念」と〈誤解〉は違うんだろうね。

〈「この現象は」～「誤概念」〉って、さっぱり、分からない。

＊

後述するように、数学の学力テストの結果と、数学の定義を読み解く力には強い相関があります。計算が不得手なわけではないのに数学が苦手、という人は、数学の定義の読み方でつまづいていた可能性が高いでしょう。

(p 104)

＊

「定義を読み解く力」って、何？ 「2 で割り切れる数を偶数という」という「定義」を〈「2 で割り切れる整数」「を偶数という」〉などと校正する「力」かな？

「定義の読み方でつまずいて」って、どういうこと？ 〈躓く〉は「途中で失敗する」(『広辞苑』「躓く」)ということだよ。知らないの？ 知ってて、わざとかな？ 読者を躓かせるため？

#### 14 リーディングスキルテストとは何か？

##### ⑥具体例同定(2)

「定義」に確かな意味はない。

＊

定義は、数学や理科の教科書だけでなく、辞書や社会科の教科書にも登場します。

(p104)

＊

「定義」の話を始めると、やたらとややこしくなる。

＊

そこで、「月は地球の衛星である」のような表現もそれ自体では定義か命題かが区別できない。

(中略)

定義には、アリストテレスのトピカに由来する伝統的な例をはじめとして、正しい定義の規則(およびそれにそむいたときの誤謬)があげられてきた。定義は種差と最近類によるべきだという記述の規定もその一つである。しかし、この例も含めて、伝統的な定義の規則の有効性はいずれも現在では疑問である。

(『哲学事典』「定義」)

＊

読解力が伸びないのは、意味不明の悪文や難解な文章を読み続けるせいだろう。そういう文章は丁寧に読んでも無駄だから、雑に読む。そのうち、飛ばし読みが癖になる。しかも、飛ばし読みができると賢くなったように勘違いしてしまう。

悪文の例は、すでに挙げた。本書だ。あるいは、本書は、私にとって難解すぎるのかもしれない。

本書の問題は難しくない。だが、新井の解説は難解だ。

問題07(p104)も難しくない。問題文をきちんと読解できなくても、常識で選択できるからだ。

間違えた人は、あまりにも簡単なので、ひっかけ問題だと思って狼狽えて余計なことを考えて躓いてしまったのだろう。裏読みをする癖がある。その場合、単に読解力が低いのではなく、苦労性を克服できるほどの高い読解力がないのだ。

＊

たとえば、サイバーセキュリティに関するオンライン研修で、悪意ある攻撃の種類として「ランサムウェア攻撃」というのがある、ということを学ぶようなシーンを思い浮かべてください。

(p 106)

＊

私にはできません。

## 15 「シン読解力」が学力を左右する

蛇が自分の尻尾を飲んでいるみたいだ。

＊

実は、RST の能力値と学力には強い相関関係があることがわかっているのです。

(p 107)

＊

「学力」とは、何か。

その前に、〈能力〉について調べる。

＊

①物事をなし得る力。はたらき。

②〔心〕心身機能の基盤的な性能。「知的―」「運動―」

③〔法〕ある事について必要とされ、または適当とされている資格。「権利―」「一者」

→能力開発研究所

(『広辞苑』「能力 faculty」)

＊

「学力」という「能力」は、心理学用語か。法律用語か。あるいは、漠然とした意味の言葉か。

＊

一般的に、計画的な学習によって達成された能力、特に認識能力をいう。あるいは、学業成績として示される能力を示すこともある。ただし、学力に関して、一義的に定義づけられるような教育学的なコンセンサスは成立してはいない。それは、学力の概念が、人間観や発達観、教育観や学校観などと深い関わりを持ち、教育や学校に対する時代や社会の要求と相関して多様だからである。

(『百科事典マイペディア』「学力」)

＊

これが常識だろう。

新井は、この常識をひっくり返したいらしい。だが、ひっくり返せないとわかっている。だから、曖昧な話を続ける。

＊

文部科学省が行っている「全国学力・学習状況調査」は名前が長いので、学校関係者では「全国学力テスト」や「学テ」と略して呼ばれています。小中学生の学力調査はさまざまな名前で古くから実施されていましたが、学校や地域間の競争が過熱し、反対運動が起こったこともあり、1964年にはいったん中止されました。

しかし、今世紀に入り、世界の先進諸国の大半が加盟する OECD が加盟国を対象に実施する学習到達度調査（PISA）で日本の順位が低かった、いわゆる「PISA ショック」をきっかけに、2007 年に今の名称で復活したという経緯があります。

（p107～8）

＊

「反対運動が起こったことも」の「も」は、おかしい。

＊

①同じようなものの中から一つのものを取りだしてしめすことば。〔例〕父のことも作文に書こう。

②いくつかのものをならべてしめすことば。〔例〕手も足もすっかりよごれてしまった。

③かるい強めや感動をあらわすことば。〔例〕一〇〇〇円も使ってしまった。

（『小学国語辞典』『も』『助詞』）

＊

本書の「も」は、①か③のどちらかのはずだが、さて、どちらだろう。

①だとすると、もう一つは「同じようなもの」は〈「競争が過熱し」たこと〉か。その場合、この文は悪文と評価できる。

③だろう、多分。新井は、「反対運動が起こったこと」について、驚きの芝居をしているらしい。小賢しい。

「いわゆる「PISA ショック」をきっかけに、2007 年に今の名称で復活した」という部分は意味不明だ。「きっかけ」が怪しい。かなり怪しい。

PISA は黒船かな。

要するに、「学力」とは「学テ」によって評価される能力なんだろう。

じゃあ、堂々巡りだよな。

新井は、このことをちゃんと知っていて、知らん顔をしているのだ。

「学力」をきちんと定義することはできない。そのことを知っていながら、新井は PISA をジャンプ台に使って跳んだのだ。

だが、うまく跳べなかった。

＊

「RST の能力値と学力は相関する」と言っても、開発者である私がデータを分析したのでは説得力に欠けますから、まずは第三者の分析を紹介します。

(p108)

\*

軌道修正ね。

「説得力」は意味不明。

「第三者の分析」なんか、要らないんだよ。

「学力」の定義が万人によって共有されていないのだから、「分析」なんか、いくらや  
ったって、意味がない。

\*

この相関係数の高さは、「シン読解力が学力をほぼ決定している」と言ってもよい結果  
でしょう。

(p 113)

\*

〈学力がシン読解力をほぼ決定している〉と言っではいけないのかな。

\*

「ちゃんと読めば誰でも正答できるはず」の RST は、思考力や判断力を測り、自分の  
意見を書くことを求める学テとも、知識や教科固有のスキルを問う一般的な学力テストと  
も強い相関があることがわかりました。

(p 113)

\*

「ちゃんと読めば誰でも正答できるはず」って、同語反復だろう。

## 16 第3章 学校教育で「シン読解力」は伸びるのか？

理解できない。

\*

誤読しようがない説明文を誤読した人にできるアドバイスは「ちゃんと、しっかり読み  
なさい」以外、実は存在していないのです。

(p 137)

\*

「誤読しようがない説明文を誤読した人」という言葉には意味がない。

〈「アドバイスは」～「存在して」〉という言葉には意味がない。

平易な文を「誤読した人」にしてあげられることは「アドバイス」ではない。対話だ。  
なぜ、誤読したのか、知りたくないの？

新井は、「誤読」と〈無理解〉を混同しているらしい。

無理解の場合、文法をよく知らないか、意味を知っている言葉の数が少ないか、どちら  
かだろう。勿論、両方ということもある。

「誤読」の原因は複雑だ。先入観、偏見、信念、信仰などが災いしている。

＊

初めに知ったことによって作り上げられた固定的な観念や見解。それが自由な思考を妨げる場合にいう。

(『広辞苑』「先入観」)

＊

読解力は、先入観を前提に語られ、書かれた文章を真に受けて買いかぶらないために必要なのだ。要するに、詐欺の被害者にならないためだ。そして、自分が先入観から自由になるためだ。つまり、自分で自分を騙すような作文をしていないか、検討するためだ。

＊

多数の人々の態度や行動に働きかけて、一定の方向に操作しようとする意図的・組織的試みである。論争的な政治的・経済的・社会的問題をめぐって世論を宣伝者にとって有利な方向に操作しようとする政治的宣伝は、過去のいかなる政治社会においても重要な役割を果たしてきたが、現代の大衆民主主義のもとでは、マス・コミュニケーションの発達と結びついてますますその重要性を増しつつある。

(『ブリタニカ国際大百科事典』「宣伝」)

＊

この事典が出た頃には、SNS は普及していなかった。

## 17 第4章 「学習言語」を解剖する

「学習言語」は意味不明だ。

＊

ある特定の集団が用いる、音声または文字による事態の伝達手段。個別言語。日本語・英語の類。

(『広辞苑』「言語」)

＊

「学習言語」は「スラング」だろうか。

＊

学校での教育で使われている言語、つまり教科書で使われている言語を「学習言語」、日常会話などで使う言語を「生活言語」と呼んで区別することがあります。

(p 141)

＊

誰が「区別する」のか？

この「区別」は変だ。

新井は、発信者側からの一方通行の「自己完結的な文書」(p82・p140)と、「日常」に限定されない「会話」を「区別」したいのだろう。前者は「文書」に限らず、講義や演説も含めた言語活動のことに違いない。また、後者は「会話」に限らず、議論を含むが、自分との「会話」のような独白も含むのだろう。

新井は、後者を忌避しているのに違いない。

＊

言語を話したり書いたり、あるいは聞いて、また読んで了解したりする行動一般。外部から観察できない心的な部分も含む。

(『日本国語大辞典』「言語活動」)

＊

要するに、空気が読めないのね。読めなくてもいいんだよ。読めたから偉いってことはないし、また、読めても読めないふりをするおとぼけも交際の技術だ。しかし、空気を読めないという「心的な部分」を隠蔽してはいけない。なぜなら、隠蔽に忙しいと、自分の作文に対する反省的読解力が働かなくなるからだ。その結果、意味不明の悪文を堂々と公開してしまうことになる。

さて、「「学習言語」を解剖」となると、「スラング」としか思えない。

＊

事物の条里をこまかに分析してこれを研究すること。

(『広辞苑』「解剖」)

＊

新井の「学習言語」なるものは、本当に必要なのか。

＊

南米に、路上で物売りをして小銭を稼ぐ貧しい少年たちがいました。彼らは3桁や4桁の数の引き算ができ、かつ売り上げの何割を元締めに渡すかといった割合算をこなしていました。ところが、彼らを学校に入れたところ、2桁の足し算も「学校で教えたやり方」ではできなかったのです。

(p141)

＊

「引き算」の話が「足し算」に変っている。

「割合算」は意味不明。

「学校」の教え方が下手なんじゃないの？

この「少年たち」は、日常的に習得していた計算方法を禁じられ、「学校で教えたやり方」もできなかったとしたら、この先、どうやって「稼ぐ」のか？

＊



ただ RST の評価と学力との相関関係の強さを考えると、「生活言語」は獲得できたのに「学習言語」の習得に失敗したことが主な原因ではないか、そんな子がたくさんいるのではないかと私は考えるようになりました。

(p142)

＊

この文は、筆者の実感を隠蔽しているようだ。

〈自分は「学習言語」の習得には成功したのに、「生活言語」は獲得できていない〉と考えたくないのだろう。

「生活言語」なるものが獲得できていたら、女だから「学力」が低くても呑気に暮らせたのかもしれない。「学校」以外の場所で他校の女子と出会うと、リボンを見てくすくす笑って、楽しそうだから男子たちも寄ってきて、おばさんになると友達なんかすぐできて、出産が趣味で、「呼吸をするようにウソをつき」(p 75) まくる子どもたちに「生活言語」を獲得させ、64 歳になっても夫と仲良しで……

「そんな子がたくさんいる」のは、いけませんか？

可愛いだけじゃ駄目ですかって、駄目でしょうね。でも、そのあたりのことについてきちんと「解剖」ができれば、可愛いだけと一緒にだろう。

おかしい文を書くと、変に勘繰られるんだよ。

## 18 摩訶不思議な「数学語」の世界

「摩訶不思議」って、どういう冗談だろう。「数学語」は意味不明。「世界」は「スラング」かな。

GOTO 『夏目漱石を読むという虚栄』〔5 2 1 3 冬彦さん〕

＊

### 問題 01

Q 以下の条件に当てはまる図をすべて選びなさい。

平面上にいくつかの円がある。どの 2 つの円も異なる 2 点で交わり、また、どの 3 つの円も同一の点で交わっていない。

(p 144)

＊

選択肢①は円が 1 個で、②は円が 2 個で、③は円が 3 個で、④は円が 5 個だ。正答は①②③だが、私はのっけから①を除外してしまった。

＊

ポイントはまず「いくつかの」という言葉にあります。生活言語ではふつう、「いくつかの」は 2 つから 6 つくらいまでの少ない複数を意味することが多いでしょう。けれども

数学では、「いくつかの」というのはひとつ以上、場合によっては 0 以上のあらゆる整数を意味します。

(P145)

＊

私の誤答の原因は、「いくつかの」だけのせいではない。まるで念を押すように「どの 2 つの円」さらには「どの 3 つの円」と書いてあったから、〈答えは円が 2 つ以上だな〉と誤ってしまったのだった。

「あらゆる整数」が「0 以上」は間違い。

＊

1 から始まり、次々に 1 を加えて得られる数（自然数、正の整数、およびこれらに  $-1$  を乗じて得られる負の数（負の整数）および 0 の総称。

(『広辞苑』「整数」)

＊

「場合によっては」とは、どんな「場合」か。〈答えはいくつか?〉などの「場合」ではないのか。

＊

①不定個数をいい、また個数を問うのに使う。どのくらいの数。人の年齢を問うのにも使う。源氏物語（夕顔）「国の物語など申すに、湯桁（ゆげた）は一と問はまほしくおぼせど」「年は一にか、ものし給ひし」。「一買ったか」

②多くの数であることを示すのに使う。「一になっても子供だ」「橋がいくつもかかっている」

(『広辞苑』「いくつ」)

＊

「学習言語」や「生活言語」は意味不明だが、専門語と日常語との意味がかなり違うとしたら、専門語の意味を誤解して庶民が日常語に用いる場合だろう。あるいは、誤解ではなく、比喩として用いる場合もある。

そもそも、「いくつかの」は専門語ではなかろう。

＊

数学では、「名づけ」のルールも生活言語や国語とは違います。

(p 147)

＊

「名づけ」は〈命名〉のつもりだろう。しかし、次に出て来るのは「定義」(p102)ではないのか。

＊

「2 つの辺の長さが等しい三角形を二等辺三角形という。また、3 つの辺の長さがどれも等しい三角形を正三角形という」

(p 147)

\*

だから、何？

\*

生活言語や国語では、「正三角形は二等辺三角形ではない」というのが通常の解釈だろうと思います。

(p 147～8)

\*

「生活言語」は意味不明。「国語」が〈国語科〉の略なら、雑だ。「思います」は、ひどい。出典はないのか。

私は、日常会話で「二等辺三角形」も「正三角形」も用いない。それどころか、〈三角形〉も用いない。しかも、角が円くても〈三角〉と言う。

GOTO 『夏目漱石を読むという虚栄』〔3 2 4 2 『みれん』〕

楽器のトライアングルは角丸で、しかも、一つの角がない。

\*

〔数〕(triangle) 一直線上にない三つの点のそれぞれを結ぶ線分によってできる図形。三つの内角をもつ。

(『広辞苑』「三角形」)

\*

これが「名づけ」なら、「数学語」では〈三辺形〉と呼ぶべきだろう。

『200 万語専門用語 英和・和英辞典』によると、ビジネスや経済では“triangle”を「三辺形」と呼ぶらしい。

成程、「数学語」って「摩訶不思議」なんだね。

## 19 物理と生物は言いたいことが違う

この「は」は怪しい。

係助詞の「は」について、後に出て来る。

「悪文だ！」との批判が殺到した「アミラーゼ問題」(p 153)の蒸し返しが始まる。

\*

つまり、「酵素で分解されるか否かは、どんな物質でできているかだけでは決まらない」ということを伝えるための分かりやすい例として、アミラーゼとデンプンとセルロースの関係を取り上げたのです。そう考えると、なかなかほかでは代替できない、よく練られた文だと感じます。

(p155)

\*

笑えるね。

「「酵素で分解されるか否かは、どんな物質でできているかだけでは決まらない」ということを伝えるためのわかりやすい例として」と補ったら、「「悪文だ！」との批判が殺到し」なかったかもしれないよ。

「そう考え」ないと、どうなる？

「ほかでは」は、〈「ほか」の文「では」〉と、きちんと書きなさい。なぜ、書かない？〈適切な「ほか」の文があるかもしれない〉と考えたくないからだろう。〈考えたくない〉と自覚することさえ恐れているからだろう。

「練られた」のではなく、〈捏ね回された〉のかもよ。わかりにくくたって、不合理でさえなければ構わないはずだ。なんで、そうきりきりしてるの？

〈「代替でき」ない〉という証拠を出しなさい。

「感じます」は、実に怪しい。

新井は、批判者たちに向かって、〈どのように書き換えたら「悪文」でなくなるのですか〉と尋ねたのだろうか。尋ねたが、返答がなかったのか。返答はあったが、そっちこそ「悪文」だったのか。いやいや、尋ねなかったんだろうね。なぜ、尋ねなかった？ AIにも尋ねていないよね？

＊

先日、とある医学系の学会で「アミラーゼ問題」とその正答率を紹介したところ、会場からどよめきが起きました。生物系の学習言語で学んできた医師たちにとっては、『「アミラーゼ問題」を読めない人がいる」という事実そのものが、驚きだったようです。

(p 155)

＊

「驚きだったようです」の「ようです」は怪しい。「驚き」の理由について、新井は聞いて回らなかったらしい。なぜ、聞かない？

学会に出ていた新井は「医師たち」からの更なる批判を恐れたのだろう。書き手となった新井は、そのときの恐れを隠蔽している。隠蔽の痕跡が「ようです」だ。

真相は、「読めない人がいる」ではなく、〈知らない人がいる〉だろう。「医師たち」だって、「学んで」いる頃は「読めない人」だったのかもしれない。

知っているからこそ悪文でも正しく読解できるのだ。

＊

そして、教科書を執筆しているのは、もちろん、そのような各分野の専門家です。その結果、「読める人は読めるが、読めない人は読めない」教科書ができあがってしまうのでしょう。では、それらを「生活言語」に、あるいはマンガや動画に置き換えられるかというところ、そうはいきません。それができるぐらいなら、最初から学習言語など生まれません。

(p155～6)

＊

意味不明。

「その結果」と大上段に振りかざしたのは、〈だから〉と書きたくなかったからだろう。〈だから〉と書くと、〈専門家は教科書を執筆すべきではない〉という結論に雪崩込みそうだからだろう。

「読める人は読めるが、読めない人は読めない」は無意味だ。

「開いてるときは開いてるけど、開いてないときは開いてない」と、千鳥のボケは執拗に繰り返す。新井は、「生活言語」に疎いみたいだ。

「できあがってしまうのでしょうか」と、推量だよ。無責任だね。

「教科書」を読むだけで「専門家」になれるのなら、講義は要らない。

学習用の「動画」や「マンガ」を売るのは詐欺だろうから、「そうはいきません」と、放送局や出版社に怒鳴りこみなさい。

「それ」を指す言葉がない。「それ」は〈そういうこと〉が適当だ。

「生まれません」だとさ。誰かが生むんだろう？ そうだとしても、学習は生殖かい？

＊

となれば、「学校で」これらの教科書を読めるようにする以外にありません。

(p 156)

＊

「となれば」は意味不明。「その結果」と同様で、論理の飛躍を隠蔽するために悪用した言葉だろう。

「学校で」が鉤で括られている理由は、不明。この「学校で」も「学習言語」かな？

「学校で」の前にあるべき〈家庭ではなく〉などが隠蔽されているらしい。鉤は隠蔽の痕跡だろう。

誰が「読めるように」してくれるのか？ 「専門家たち」ではないよね？ AI かな。だったら……

休憩。

## 20 学習言語の「マルチリンガル」になる

意味不明の「学習言語」に「マルチリンガル」が加わった。これに鉤が付いている理由も不明だ。単なる強調か。比喩か。あるいは、「スラング」か。

＊

(3 言語以上の) 多言語を使用すること。

(『広辞苑』「マルチ - リンガル」)

＊

新井は、「生活言語」と「数学語」のバイリンガルなのか？

＊

2種類以上の言語の間で「切り替え」が起こることを、専門用語では「コードスイッチング」と言います。たとえば、日英のバイリンガルは、日本語で話すときには日本語モードに、英語で話すときには英語モードになっている、というようなことが言われています。

(p 156)

＊

「切り替え」が「起こること」を、どうやって確かめたのか。単なる仮説か？

「というような」だってさ。でもって「言われて」だもんね。無責任にもほどがある。何の「専門用語」かな？

＊

社会言語学の用語。会話の場面や相手などの条件に応じて、使用するコード（言語体系）を変換すること。職場や学校では標準語を使うが、家庭では方言を使うなど。コード切替え。

(『広辞苑』「コード・スイッチング」)

＊

「バイリンガル」の場合の「言語」と「コード」は異質だろう。

ちなみに、あるバイリンガルの人が〈人と話し合うとき、いつも二股を掛けているような気がして不安だ〉と語っていた。

＊

日本語では、おおむね東京の中流階級の使う東京方言に基づくものとされている。

(『広辞苑』「標準語」)

＊

『國語元年』(井上ひさし) 参照。

ある関西人が〈標準語で嘘をついても恥ずかしくない〉と語った。

＊

各教科（場合によっては各単元）の学習言語間のコードスイッチングができる子は、相対的に「シン読解力」が高くなるに違いありません。

(p 156～7)

＊

この「コードスイッチング」は「スラング」だろう。

「コードスイッチングができる子」かどうか、どうやって調べるのか？ 真意は逆で、〈「シン読解力」が高くなる子はコードスイッチングができるに違いありません〉だろうね。でも、逆も真なりかな？

「相対的に」は意味不明。だから、「違いません」という無責任な断定は無効だ。

＊

青春（1905－06）〈小栗風葉〉春「僕は善を相対的のものと見做して、美を絶対的理想境として唱はうと思ふのです」

（『日本国語大辞典』「相対的」）

＊

『シン読解力』のような悪文を読んで分かるような気がする人は、相対的に「シン読解力」が低くなるに違いない。

＊

RST は知識を問わないテストです。

（P157）

＊

〈「知識」を問う〉は意味不明。〈「知識」の何かを「問う」〉の不適當な省略らしいが、こういう省略を許すのが「数学語」だろうか。「知識」をまったく必要としないで理解できる言葉など、あり得ない。もしかして、「知識」は「スラング」か。

＊

厳密な意味では、原理的・統一的に組織づけられ、客観的妥当性を要求し得る命題の体系。伝統的に信念（ドクサ）と区別され、「正当化された真なる信念」と定義される。

（『広辞苑』「知識」）

＊

「生活言語」とは「ドクサ」のことだろうか。

＊

スムーズにコードスイッチングするコツは、「生活言語の常識を必要以上にひきずらないこと」でしょう。「カリフォルニア大学は Uuniversity of California なのに、なぜ東京大学の英語名称は The Uuniversity of Tokyo で、京都大学は Kyoto University なの？」と悩んでみても始まりません。

（p158）

＊

「生活言語の常識」は意味不明。

「必要以上に」かどうか、どうやって決めるのか。

「生活言語の常識」の一例が〈大学の日本語名称〉か？ 「生活言語」と「学習言語」の相違の一例が、日本語と英語の相違らしい。では、日本語は「生活言語」で、英語が「学習言語」なのか。英米人の全員が「学習言語」を用いているわけか。違うようね。おかしい話だ。

「悩んで」は唐突だ。こんな疑問で悩む人がいるのだろうか。〈悩む〉も「学習言語」かな。〈悩む〉は〈迷う〉を隠蔽しているらしい。「英語名称」で迷うのは日本人として普通だから、この先、筋が通らなくなる。不都合を隠蔽するために〈悩む〉という語を用いて、ちょっぴりおどけてみせたわけだ。狡いな。

「悩んでみて」の「みて」って、要る？ 要るんだろうな。知らんけど。

「始まりません」って、何が始まるべきなのか？

＊

自分がスラスラ読める文章を、なぜほかの人が読めないかを想像するのはとても難しいものです。——RST を毎年受検させる意義はここにあります。

(p159)

＊

「スラスラ」は、普通、〈すらすら〉と平仮名で書くことになっている。カタカナにしたのは、道化だろう。

「読めないかを」の「を」は〈ということ「を」〉の不適當な略らしい。

自分がすらすら読めない文章を、なぜほかの人が読めるかと想像することは、かなり難しいことだ。

たとえば、『シン読解力』が何十万部も売れている理由を想像することは難しい。ただし、想像できなくはない。ビジネス本を読み漁る猪口才な「ホワイトカラー」の読解力が低いからだろう。カリフォルニア大学や東京大学や京都大学の学生は、こんな本を読んで理解できるのだろうか。理解して、なおかつ、賛同するのだろうか。さらには喜んで、著者に感謝のメッセージを送るのだろうか。ありそうにないよ。でも、まあ、京大生だけは別かな。

「ここ」は、どこですか。

「マルチリンガル」のあなたは誰ですか。

## 21 バックキャストिंगで教育すべき内容を決める

わかったふりをするのは難しくない。しかし、わかったつもりには、簡単には、なれない。

＊

最初にあるべき未来の姿を描き、そこから逆算して現在すべきことを考える思考法をバックキャストिंगと言います。教育はまさに「どのような人材を育てたいか」から逆算して、今すべきことを決めていきます。

(p 164)

＊

「そこ」って、どこ？ 「逆算」は、ひどいよ。

この種の「思考法」は空想的だ。宗教家や全体主義的政治家が用いる。

＊

複数の未来の中から「ありたい未来」を定め、今なすべきことを考える手法。スウェーデンの環境 NGO（非政府組織）「ナチュラル・ステップ」の創始者であるカール・ロベ



ルが提唱して広まり、地球温暖化などの議論の場で用いるようになった。現在考えられる事象の延長線上に将来を考える「フォアキャスティング」とは対照的な手法である。

(『環境テクノロジープロフェッショナル用語辞典』「バックキャスティング」)

＊

地球環境に関する「ありたい未来」は、ほとんどの人にとって同じような状態だろう。たとえば、産業革命以前の気候に戻すとか。「ありたい未来」のイメージを共有しているから、「議論」をすることができる。「ありたい未来」のイメージが共有されていない場合、「議論」は困難で、その結果、エコ・ファシズムになりかねない。

「バックキャスティング」を「教育」における「あるべき未来」に利用するのは、いかなものか。しかも、「議論」抜きで。

〈期待される人間像〉は、誰にとっても、ほぼ同じだろうか？ そんなはずはない。たとえば、〈女は子産み機械だ〉と語る人がいる。

「教育」は〈学校教育〉の略らしい。

＊

学校形態をとって行なわれる教育。家庭教育、社会教育とともに、教育の全領域を三分している。

(『日本国語大辞典』「学校教育」)

＊

〈教育〉について、ちょっと調べたが、具体的かつ明快な定説はなさそうだ。

＊

私のような、友だちが少なく、協調性が低く、先生に反抗ばかりするくせに成績だけはいい憎らしい子どもにとっては息苦しいほど、昭和の時代から日本の学校では非認知能力が重要視されてきました。

(p 165)

＊

「友だちが少なく」って、何人いたの？ 一人でもいたのなら、普通だよ。一時期に三人以上いたら、普通じゃないな。「友だち」というより、メンバーだ、ナントカ族の。

「協調性」の高低を、どうやって判断するのかな。周囲に「協調性」の低い人ばかりいる場合、どうやって協調したらよからう。

＊

集団構成員としての自覚、連帯感と相互批判、共同的活動を通じて社会的人間的資質を培うことを原理とする教育。V.レーニンの「万人はひとりのために、ひとりは万人のために」という思想に基づくもので、旧ソ連をはじめと社会主義国での教育組織の基本原則の一つ。学校、学級、ピオネール、軍隊、職場などでは、集団の要求と個人の幸福との根本的一致という前提から、共同的、集団的資質の形成が重視される。

(『ブリタニカ国際大百科事典』「集団主義教育」)

＊

「24 時間、働けますか、ビジネスマン、ビジネスマン、ジャパニーズ・ビジネスマン」という CM ソングが流れていた頃、〈日本は社会主義国だ〉と揶揄された。

＊

日本的経営の特質の一つとして欧米の個人主義に対比して用いられる言葉。個人と集団の関係において、個人は集団と心理的な一体感をもつとともに集団の目標や利害を自分のものよりも優先させていくという集団中心の考え方。

(『ブリタニカ国際大百科事典』「集団主義」)

＊

「反抗ばかりする」は〈「反抗」して「ばかり」いる〉が適当だろう。ただし、誇張だね。面倒くさいな。

数学教師が〈0.999…は1ではなく、ほぼ1だ〉と教えたので、ある生徒が反論したのだが、教師が発言を翻さないで、その生徒は怒って、〈 $0.999\cdots = 1$ 〉と書いたプラカードを掲げ、学校の廊下を歩きまわったそうだ。賛同する生徒たちが後に続いた。リーダーの生徒は、後に数学者になった。

新井は、どんな「反抗」をしたのだろう。「友だち」は「反抗」に加担したのか？ 加担しないなら、「友だち」じゃないよ。逆に、叱ってくれたら、ライバルとして一種の「友だち」だろう。どっちでもなければ、「友だち」じゃないよ。「友だち」ぶりっ子だ。

「昭和の時代」は意味不明。戦前、戦中だって「昭和」だよ。勿論、知ってるよね。近頃、〈昭和歌謡〉なんて言われているのは、大抵、昭和 50 年代の楽曲らしいが、この「昭和の時代」も、その頃を指す「スラング」だろうか。お洒落のつもり？ 新井は〈昭和 50 年代〉と明記するのが嫌なのかな。

＊,

前後と区別されるような特色をもった時期。

(『日本国語大辞典』「時代」)

＊

どんな「時代」であれ、また、どういう「子どもにとって」であれ、「息苦しい」と感じられるような指導をする教師どもの「非認知能力」が高いとは、私にはとても考えられない。連中は「非認知能力」を「認知能力」の亜種ぐらいにしか考えていないのかもしれない。とにかく、畜舎のような教室で、牧場のような校庭で、ふんぞり返ってられる人間の「非認知能力」が高いとは、私には思えない。

＊

教育者の被教育者に対する愛。教育活動の根源あるいは基本的要素の一つ。

(『広辞苑』「教育愛」)

＊

自分の「非認知能力」の低さを自慢できるのは、研究者になれる程度には「成績」がよかった人だけだろうな。

ところで、私の手持ちの辞書に「非認知能力」という見出し語はない。

新井の言葉遣いが粗いので、理解しようとする、つい、いろんな想像をしてしまう。

たとえば、〈「昭和の時代」以前、「友だちが少なく、協調性が低く、先生に反抗ばかりするくせに成績だけはよい憎らしい子ども」は特殊学級に送られていたが、「非認知能力が重要視されて」から、教師はKYを大目に見るようになった〉とかね。

## 22 国語と英語の教育方法に学ぶ／資料を読み解く (1)

私には、もう無理かもしれない。

＊

生活言語としての日本語をよく耕す、課題外在性認知負荷を十分に下げするためのトレーニングをする。これで、学校教育の本丸である学習言語を習得する準備が整いました。

(p 190)

＊

「日本語」を「耕す」？

「耕す」で、一旦、文は終わっているらしい。だったら、その次に、どんな言葉があるべきだろう。〈そして〉や〈さらに〉だろうか。どちらでもなく、〈すなわち〉や〈つまり〉などだろうか。私には決められない。

「課題外在性認知負荷」？ 〈「嫌いというのは反対の意味よ」なんて「昭和の時代」の歌を聞くと疲れる〉ってことかな。

「学校教育の本丸」？ 「組織や物事の核心の部分」(『広辞苑』「本丸」と置き換えてみても、やはり意味不明。「本丸」は「学習言語」かな。「スラング」？

「これ」って、どれ？ 指すものが一つなら、先程の省略された言葉は〈つまり〉などだろう。そうではなく、〈そして〉などだったら、「これ」は〈これら〉と記すべきだ。

前の文の終わりの「する」と後の文の終わりの「整いました」の関係が不明。「整いました」は〈整います〉が適当なのでは？ あるいは、〈整うことが証明されました〉と書きたくて書けなかったのだが、雰囲気だけは何とか伝えたくて、こんな悪文を作ってしまったのだろうか？ そうだとしたら、この文は「生活言語」かな。

＊

漢字製翻訳語が日本人にとって普遍的な言葉である、ということは、日本語から外国語へという翻訳の場合によく示される。たとえば、「あらわす」とか、「あらわれる」というやまと言葉を横文字にしようと思うとき、これを「表現する」と言い換えてみる。そして、その上で、**express** だ、と思う。こみ入った文章の翻訳の場合ほど、このような漢字表現を媒介とした横文字への転化は、はっきりしてくるだろう。

(柳父章『日本語をどう書くか』『日本語の二重構造』)

＊

GOTO ミットソン『夏目漱石を読むという虚栄』要点 7 二重構造。

＊

書き言葉と話し言葉との対立は、こうして、書き言葉の側から、話し言葉を警戒し、拒否し、それと対立しつつ形作られていく、と見ることもできる。書き言葉は、日本語では、話し言葉を単にうつすものではない。この点、西欧語におけるパロールとエクリチュールの関係と明白に違っている。

話し言葉は、土着の深い根に支えられて脈々と生き続けてきたわけだが、他方で、書き言葉の側からの警戒、拒否をその裏側で受けとめている。話し言葉は、改まった言葉遣いではない。まともに表に出せる言葉ではない、として、絶えず自らを規定させられている。表に出し、外に出したら、そのままでは「分ないはず」の言葉使いなのである。それは、気心の知れた者どうしの間でのみ許される裏方の言葉使いであり、だからこそまた、ホンネを吐くことのできる言葉なのである。

こうして、日本語における二重構造は、基本的には翻訳に適しているか否か、ということから、個々の言葉においても、また文体、文法の面でも考察することができるが、さらに、「分るはず」の書き言葉の文じたい、「分らないはず」の話し言葉の文じたいにおいても、二重の構造をとらえることができる。時枝文法の入子型とは、このような二重構造の典型的なモデルである、として見直すこともできるであろう。

(『日本語をどう書くか』同前)

＊

新井の考える「学習言語」と「生活言語」の関係は、「西欧語におけるパロールとエクリチュールの関係」を模したものではないのか。

新井は「ホンネを吐くこと」ができないらしい。だが、「ホンネ」を悪文の裏にちらつかせている。邪気がある。だから、とても読みづらい。

「時枝文法」と学校文法は、かなり違う。

＊

時枝誠記の提唱した言語観。ソシユールの、音と意味の結合体として言語をとらえる見方は、言語を人間を離れて存在する「物」として見る誤った言語観であるとし、言語主体が思想を表現し、理解する過程そのものとして言語をとらえるべきことを主張した学説。

(『ブリタニカ国際大百科事典』「言語過程説」)

＊

「時枝文法」に悪乗りすると、「自己表出」(吉本隆明『言語にとって美とは何か』)などに落ち込む。

## 22 国語と英語の教育方法に学ぶ／資料を読み解く (2)

学力テストなどの成績を上げたいだけなら、過去の問題と解答をどんどん暗記してしまえばいいのだ。

カンニングみたいにして得た正答と、自分で考えて得た正答の違いを、AI は識別できるのだろうか。

できないはずだ。

＊

### 問題 01

Q 下記の文を読み、月の満ち欠けの様子を表す図として適当なものをすべて選びなさい。

月は西側から満ち欠けする。言い換えれば新月から満月の間は西から徐々に月が満ち、満月から新月の間は西から月が欠けていく。また、新月の後、次に新月が見られるのは約 1 ヶ月後である。

(p 194)

＊

「新月が見られる」？

ううん。

まあ、いいや。

選択肢は 4 つ。ただし、「問題 01」では記号で表されている。なお、括弧内は説明のため、私がざっと記したもので、正確ではない。

①下弦の月（二十日余り月）の 15 日後、上弦の月（八日月）。( $22+15-30=7$ )

②立待月の 15 日後、三日月。( $18+15-30=3$ )

③三日月の 15 日後、立待月。( $3+15=18$ )

④十三夜月の 15 日後、三日月。( $13+15=28\neq 3$ )

『明鏡国語辞典』【月】の「月の満ち欠けと呼び名」を参照。

三日月（月齢 3）は、漢字の〈月〉という字に似ている。三日月は上弦の月（月齢 7）の一種だから、上弦の月の明るい側は、三日月の明るい側と一緒だ。なお、十三夜月は下弦の月（月齢 22）の一種だ。

よって、「適当」なのは、①②③とわかる。

簡単だろう？

正答した人の多くは、私のように常識に基づいて選択したのかもしれない。だったら、「問題 01 は「概念図」の読み解きに関する問題」として不適当だろう。

言うまでもなく、この問題が解けたぐらいで、お月さんのことがわかったつもりになってはいけない。『ドラえもん の学習シリーズ[新版]天体（地球・月・太陽・星の動き）がわかる』の「第 3 章 月の動き」ぐらいは見ておきなさい。

本当は、「約1ヶ月」の間、夜空を眺めるべきなのだろうが、私はやっていない。また、昼の月を見ることも必要だ。

＊

恥ずかしながら、私もこの問題が解けませんでした。

私には、考えないと左右がわからない、という認知的欠点があります。また、動く2つの物体の関係に関する認知も弱いです。そのため、小学校の頃から、月の満ち欠けの単元が苦手でした。この文章を読んだときに、「月は西側から満ち欠けする」ことと図を対応させる認知負荷をすべて持っていかれて、図の上に書かれている「15日後」まで情報処理ができず、「すべて正解」だと思ってしまいました。

(p194)

＊

「認知負荷」は意味不明だが、普通の人なら月の満ち欠けの図を覚えているはずだから、認知など不要だ。

新井が「15日後」を読み落とした理由は何だろう。〈「15日」は「約1ヶ月」の半分〉ということに気づかなかったのかもしれない。そうだとしたら、「問題01」の本質を理解していなかったことになる。

新井は自分の失敗について苦しい言いわけを並べているが、障害を隠れ蓑に使っているみたいだ。だったら、狡いよ。また、正答できなかった人の「負荷」やら何やらを調査していないらしいが、調査しないのは〈他人様の本音を探るのは失礼だ〉と勘違いしているからかもしれない。しかし、何だっぺかんだっぺ調査すべきだろう。正答した理由さえも調査すべきだろう。

月を指せば指を認む？

## 22 国語と英語の教育方法に学ぶ／資料を読み解く (3)

人々は次の文を読んで理解できるのだろうか。私には理解できない。専門用語が用いられているのなら、諦められる。だが、次の文はそうではない。用いられている語句は、すべて読みなれたものばかりだ。

＊

多くの先生は、「グラフからわかったことを読み解いてみよう」と言うだけで、どのように読み解けばよいのかの指導をしていません。

(p195～6)

＊

「グラフからわかったこと」？

「わかったことを読み解いて」？

「多くの先生」ではなく、少ない「先生」は、どんな「指導」をしているのだろうか。新井の理想とする「指導」は、どんなものか。それは、この先に記されているのか。記されていない。もしかしたら、記されているのに、そういう文を見出すことができないほど、私の読み方は劣っているのかもしれない。あるいは、そういう文は、次の章で記されることになるのだろうか。期待せずに我慢する。

＊

「人に伝わるグラフの読み解き方」はビジネスパーソンにとっても重要です。「昨年に比べ売り上げが上がりました」と言うより、「昨年に比べて売り上げは 20%上がりました」のように数値を入れる方が効果的です。「過去 5 年間の前年比売り上げは年々増加する傾向にあり、今年の前年比は 1.3 倍に達しました」と言うほうが、ビジネスが着実に拡大していることが伝わります。

(p196)

＊

〈「人に伝わる」何かの「読み解き方」〉というのは、〈何か〉が何であれ、意味をなさない。そのはずだ。違うのか？

主題は読解力だろう？ いつの間にか説得力の話になっているようだ。いつからそうなったの？

「人に伝わる」かどうかは「人」によるよね。

「ビジネスパーソンにとっても」の「も」は何だろう。

＊

「は」と対比される語で、「は」は幾つかの中から一つを採り上げる（それ以外を退ける）語であるのに対し、「も」はそれを付け加える意を表す。

(『広辞苑』「も」)

＊

「ビジネスパーソン」以外の誰に「とっても重要」なのか？ その誰かが、生徒や学生なら、こんな話をする必要はない。あるいは、〈生徒や学生にとって、一時的に「重要」であるだけでなく、卒業後、「ビジネスパーソンに」なってから「も重要です」〉という文を端折ったつもりか。でもなくて、〈数理論理学者にとってだけでなく、学者になれなかった「ビジネスパーソンにとっても重要です」〉と暗示したつもりか。

「数値を入れる」は、ビジネス用語かな。

「効果的」？ 唐突に何だよ。

「ビジネス」が「拡大」？ 「スラング」かな。

年毎の「読み解き」に終わらず、月毎の「読み解き」をやったらもっと「効果的」なようだ。しかし、「人」の気を「認知」できないと、むしろ逆効果で、〈おい。誰かあいつを止めろ〉と上司が怒りだすかもしれない。「人」が素人なら、うんざりして居眠りを始めるかもしれない。怪しまれるかもしれない、〈あいつ、詐欺師なんじゃないか〉って。

「仕事」に自信のない人に限って、もっともらしい「数値」を並べたがるものだ。「数値」は、トラブルが起きたとき、責任逃れのための口実として使えるから、便利だ。便利は危険。

## 23 第6章 「シン読解力」トレーニング法

### トレーニングで個性も伸びる（1）

遂に、私の読解能力の限界を超えた。

私には「トレーニング法」の説明が理解できない。だから、「トレーニング」はできない。

＊

こうしたトレーニングを積んでいけば、誰でも定義文を読み解けるようになるし、グラフなどの資料を読み解けるようになります。

（p216）

＊

「定義文」と「読み解ける」の二つの語句の意味が、私にはまだ理解できないのだ。続き。

＊

そう説明すると、「それでは子どもたちを画一的な人間に育てることになる。子どもたちには、自分の言葉で自分の考えを言える子に育ててほしい」と反論する方がたくさんいます。特に熱心な先生ほど、そうおっしゃるのです。

（p216）

＊

「説明」に対する「反論」になってないよね。だから、「反論する方」がおかしいのではあるけれど、「それでは子どもたち」云々を「反論」と受け取った新井もおかしい。つまり、どっちもどっちだ。どっちも不合格。

みなさん、私の書いていることが理解できますか？

新井が提唱しているのは読解力の向上であって、発言力の向上ではない。そんなことさえ理解できずに「反論する方」の理解力は低い。ただし、相手が誤解しているということに気づかない新井の理解力も低い。

そして、だよ、この一文を理解したつもりになってしまう読者たちの読解力は、かなり低いのだ。

「反論」そのものも悪文だ。「反論する方」の作文力は低い。そして、そのことに気づかない新井の理解力は低い。



「画一的な人間」は意味不明。「画一的」は〈画一的教育〉などと用いるのが普通だろう。「画一的」は、事の形容に用いるのであり、物の形容には用いない。新井は〈「画一的な人間」ってどんな「人間」ですか〉と質問すべきだった。

新井は、「熱心な先生」に〈なぜ、そうおっしゃるのですか〉と質問したことがないのだろうか。〈誰か偉い人がそんなことをおっしゃっているんですか〉と問うべきだ。

＊

スイスの教育家。ルソー・カントの影響を受け、孤児教育・民衆教育に生涯を捧げた。人間性の覚醒と天賦の才能の調和的発達を教育の目的とし、近代西欧教育史の上に大きな足跡を残した。著「リーンハルトとゲトルート」「隠者の夕暮」など。(1746～1827)

(『広辞苑』「ペスタロッチ」)

＊

この「大きな足跡」を始末しない限り、「シン読解力」は拒否される。データをいくら見せても無駄だ。「ルソー・カント」を論破する必要さえありそう。

新井は、〈近代思想は終わった〉と言いたいのか？ 言いたきゃ言っていんだけど。

＊

でも、よく考えてみてください。「自分の言葉」ってなんですか？

(p 216)

＊

この「でも」は、新井の「自分の言葉」だろう。

「考えて」って、何を考えるの？

「なんですか？」って、なんですか？ ある言葉について「なんですか？」は変だろう。この「なんですか？」は、新井の「自分の言葉」だろう。

どんな語句の意味も、それを含む文、さらにはその文を含む物語、使用された場面などによって決まる。だから、「熱心な先生」の用いた「自分の言葉」って何なのか、本当に知りたければ、「自分の言葉」の出典を知らねばならない。出典を知らずに言葉を茶化しても、どうにもならない。研究者の態度として不適切だ。一方、「熱心な先生」は、〈新井さんよ、『隠者の夕暮』を読んでから言ってね〉と思っているかもしれない。とにかく、相手が何事か不満に思っているに決まっている。新井にはその程度の想像力もない。

ところで、私はペスタロッチを読んでいない。

シュタイナーも人気があるらしい。これも読んでいない。教育に関心がないのだ。

＊

ドイツの思想家。オーストリア生れ。独自の人智学を提唱し、それに基づくシュタイナー学校を創設。芸術・教育など多分野で活動。(1861～1925)

(『広辞苑』「シュタイナー」)

＊

新聞記者が大臣に向かって〈自分の言葉で語ってください〉と要求する。その記者の言葉には〈役人が書いた原稿を読むのはやめて〉という含意がある。そして、その含意は、大臣に伝わるはずだ。だから、この「自分の言葉」は、ある記者の「自分の言葉」ではない。「スラング」だ。報道関係者は「スラング」を使うべきではない。

GOTO 『夏目漱石を読むという虚栄』 1 2 1 0 夏目語。

＊

私が思い浮かべる「自分の言葉で自分の考えを言う人」の代表は、元プロ野球選手の長嶋茂雄さんです。

長嶋さんはバッティングの極意を尋ねられて、「スーッと来た球をガーンと打つ」と答えたそうです。

まさに、自分の言葉で自分の考えを言う手本のような表現です。

(p217)

＊

「私が思い浮かべる」のだから、「代表」は新井の「自分の言葉」だろう。

県の「代表」は県知事だろうが、日本国の「代表」は誰だろう。首相か？ 天皇か？

＊

国家を代表して外国へ派遣される最上位の外交使節。

(『明鏡国語辞典』「大使」)

＊

GOTO 『夏目漱石を読むという虚栄』 3 2 4 1 「代表者」。

「スーッ」や「ガーン」は長嶋の造語なのか？ 「自分の言葉」と〈造語〉の関係が、私には分からない。

「スーッと」云々が新井には滑稽に感じられるらしい。だが、運動の方法を教える場合、擬態語を用いるのは便利だ。スポーツでなくても、楷書の〈一〉を筆で書く場合、〈トンとやってスーと引いてウムと留める〉みたいなことを普通に言う。〈一を画く〉ようなのが〈画一的〉だ。

「代表」が「手本」に変わった。「代表」が長嶋で、彼の発言が「手本」ということらしいが、この「手本」は明らかに皮肉だ。だから、これも新井の「自分の言葉」だろう。

新井は擬態語の使用を禁止しているのか。そうかもしれないが、批判の対象は他にもあるようだ。

## 23 第6章 「シン読解力」トレーニング法

### トレーニングで個性も伸びる (2)

「トレーニング」まで怪しくなってきた。

＊

練習。訓練。特に、体力をつけるための基礎的な運動。

(『明鏡辞典』「トレーニング」)

＊

脳は体の一部だから、まあ、いいか。脳トレね。

「まさに、自分の言葉で自分の考えを言う手本のような表現です」(p217)で改行して、次に続く。

＊

先日もある大学のグループディスカッションでこんな言葉を耳にしました。信仰の自由を求めた清教徒を含む 102 人がメイフラワー号に乗ってアメリカに渡った事件についての説明です。

「イギリスがイジメたせいで、イジメられたほうがアメリカに逃げなくちゃならなくなって、マジ気の毒」

(p 217)

＊

新井は何を示唆しているのだろう。「イジメ」や「マジ」は使用禁止ってこと？

「先日も」の「も」が、またもや、怪しい。

「事件」？ 〈メイフラワー号事件〉という歴史用語があるのかな。あるのかもしれないが、私の辞書には載っていない。年表にも載っていなかった。

「説明」？ 〈感想〉だろう。

「グループディスカッション」だから、学生は「こんな言葉」を使ったんだろう。この発言者が想定している聞き手は同世代の若者であって「昭和の時代」が青春時代だった年上の人間ではない。新井はハズにされたような気がしたか。さぞかし悔しかったことだろう。

さて、この後、一行空きになっている。崖から突き落とされるような感じだ。

## 23 第6章 「シン読解力」トレーニング法

### トレーニングで個性も伸びる(3)

そろそろ、忍耐力も限界かな。

＊

学習言語は、知識を誰にでも正確に伝えるために開発された、いわば人工言語です。解釈がバラバラになるような自己流の言葉では知識は伝達できません。ですから、自己流の表現よりも、「基本の書き方」に忠実に書くほうがよいのです。

大丈夫です。そんなことで人間の個性が失われたりしません。「ほかの人に確実に伝わる文章」を心がければ心がけるほど、そして、トレーニングを積みば積むほど、かえって

その人らしさを出せるようになるはずですよ。だって、その人が言いたいことの本質をより正確に伝えることができるようになるのですから。

(p217～8)

＊

「誰にでも」は誇張だが、許容できる。

「いわば」？ 〈人工言語〉は二種ある。一つはエスペラントの類。もう一つはコンピューター用のプログラム言語。さて、どっちかな？

「解釈」？

＊

全体を理解するためには部分の精密な理解が、部分を理解するためには全体の理解が、共に不可欠であるという、部分と全体の循環をさす。

(『広辞苑』「解釈学的循環」)

＊

「バラバラ」という擬態語は使ってもいいんだね？

「忠実に」の後に続くべき言葉がない。たとえば、〈従って〉など。

「自己流の言葉」は、新井の「自己流の言葉」ではないのか？ 「自己流の表現」なら、分かる。

「自己流の言葉」と個人語は同じだとしよう。個人語と共通語の間に「スラング」がある。「スラング」は仲間内で「伝えるために開発された、いわば人工言語」だから、使用は許される。共通語は多義的で、仲間内でも通じないことがあるから、標準語を拵えたのだが、まだ曖昧なので、さらにそれを精密に作り替えたのが「学習言語」だ。

といった「知識」は不要かな。あるいは、間違いかな。私には、もう、何が何やら……

「大丈夫」は、「自己流の言葉」ではないんだね？ でも、〈大丈夫〉をネットで検索してみなさい。国語学者が現実的過ぎて実際には無責任な話をしているよ。

**GOTO** ミットソン「笑うしかない友」24・94 ハラハラ。(24・0927?)

「人間の個性」とは、まあ、大きく出たもんだ。笑いながら怒れる。

「ほかの人に確実に伝わる文章」を」の次には、〈書こうと〉などが必要だ。前の「心がければ」の次に〈上達する〉などが抜けている。そのことを「心がけるほど」が隠蔽している。〈上達する〉などがないと、「出せるようになる」は出てこない。

この「トレーニング」は〈人に伝わる文章を」書けるようになるための「トレーニング」の略だろう。しかし、この章のタイトルは「シン読解力」トレーニング法」だ。どこかで論旨がすり替わっている。どこでだろう。まあ、いいや。

「その人らしさ」なんて、どうやって……。怒りながら呆れる。

「より」は要る？

「はず」は無責任だ。

「だって」は、「自己流の表現」ではないんだね？

「言いたいことの本質」？ これって「人工言語」なの？ 新井の「自己流の表現」じゃなくて？ 一般的な「知識」を用いて個人的な「本質」を伝える？ わかる？ みんなはわかるのかい？ 私にはわからない。「生活言語」に翻訳したら、まあ、要するに、〈本音〉だろうけど、〈本音〉だと新井の読者には伝わらないのかもしれない。

「言いたいこと」があつたら、さっさと言っちゃいなよ。とにかく、吐きだせ。「伝達」なんか、どうせ、相手次第なんだから。「スラング」ですら表現できないような「本質」だったら、仕事仲間ではない友人、占い師、精神科医にでも相談したら？ アンネは空想のキティーに向けて書いたっけ。

ああ、そうだ。チャット GPT に質問したらいいんだよ。「言いたいこと」どころが、悲鳴や怒声、嘯語も許す。甘ったれの〈ダッテ、デモ〉も許す。そして、〈今の私の思いの丈の「本質」を「学習言語」に翻訳しなさい〉と命じるのだ。勿論、「チャット GPT は平気でウソをつく」(p35) ので、「ウソ」を見破るための「シン読解力」は必要だろうが、「シン読解力」さえあれば「伝達」に苦心する必要はない。つまり、「シン読解力」さえあれば、「生活言語」を使用するだけでどうにかなるのが〈令和の「時代」〉の青春なんだな。

「学習言語」に頼り過ぎると、自分の本心が自分で分からなくなるかもしれない。見かけは「学習言語」を用いながらも、実は「生活言語」ですら表現することが困難な「本質」を無自覚に露呈する癖がついてしまうかもしれない。「友だち」にすら話せない「個性」を公の場でだらだらと漏らしていながら、「大丈夫」と勘違いしているかもしれない。そうなったら、「事件」ですよ。

## 24 第7章 新聞が読めない大人たち

私は新聞が読めない。字は読めても、意味が分からない。だから、新聞を取ったことがない。だが、たまたま、2022年2月25日の新聞が見つかった。

＊

クレバ外相は「ロシアが仕掛けた侵略戦争であり、全世界はプーチンを止めなければならない」と語った。

＊

「ロシアが仕掛けた侵略戦争」の真偽は不明だが、一応の意味は分かる。分からないのは、その次だ。

「全世界」に「ロシア」は含まれる。だから、この「全世界」は〈ロシア国民を含む全人類〉という意味か？ どうも、そうではなさそうだ。

「プーチンを止める」は〈「プーチン」の行動「を止める」〉などの略だろうが、どの行動を「止める」のか。あらゆる行動を止めたら、人間は窒息する。そういう話だろうか。

〈「プーチン」の息の根「を止める」〉というのなら分かる。では、クレバはプーチン暗殺

を「全世界」の誰かに対して求めているのか。そんな仕事は自国のスパイにやらせなさい。

以上、私は新聞の字は読めるが、読解ができない。

＊

どうやら、多くの人が「15歳のシン読解力の」大人になっているようです。

(p 220)

新聞の字は読めるが、読解ができない。

数年前、『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』（新井紀子）を読んで、私は良書だと思った。人に薦めたほどだ。ところが、『AIに負けない子どもを育てる』（同）を読みながら、怪しむようになり、今回、こうして『シン読解力』を批判している。

新井の文体が変わったのだろうか。確かめようと、適当に『教科書が読めない』を開いたら、そのページに不可解な文が出ていた。具体的には引用しない。無駄な仕事が増えるからだ。

すでに書いたが、RSTは悪くない。新井の作文が悪いのだ。そのことに、数年前は気付かなかった。RSTを解いて来たからだろうか。嫌味のようなのだが、そうでもない。

私は、分かったつもりになっていた。新井を買いかぶっていたのだ。

15歳で読解力が止まる理由は、私には容易に推測できる。紙に印刷された文章の著者を買いかぶってしまうからだ。批判的に読む習慣が身に付いていないからだ。

＊

- ① 整合的である限りにおいて、複数の想像・仮定、すなわち「解釈」を認めることになります。間違っていない限り、また間違いが露<sup>あら</sup>わになるまで、その解釈は保持されてよいのです。
- ② ある解釈が、整合性を示しているからといって、それが唯一正しい解釈と考えることはできないのです。
- ③ しかし、ある解釈が周辺の記述や他の部分の記述と不整合である場合には、その解釈は破棄されなければならないのです。

(西林克彦『わかったつもり 読解力につかない本当の原因』)

＊

GOTO 『夏目漱石を読むという虚栄』（1 1 3 2「明治の精神」は時代精神ではない）

紙に印刷された文章を疑うと、〈傲慢だ〉とか、〈思い上がりだ〉とか、叱られてしまう。そのせいで読解力が止まってしまうのだろう。私は、そう思う。

## 25 驚くほど大人が読めなかった新聞記事

新聞記事は読みにくいものだ。記者が急いで書くからだろう。現在進行中の事柄を報道するわけだから、当然、結論は出しにくい。出しにくい結論を、記者が仄めかしてしま

う。だから、分かりにくくなる。仄めかしは、それぞれの新聞社の方針と無関係ではないはずだ。個々の記事は社説を前提にして読まないと、よく分からない。新聞記事を読むには、読解力がかなり上達していないと難しいのだ。

新井には、こうした常識が欠けているらしい。

＊

#### 問題 0 1 係り受け解析

Q 次の文を読みなさい。

ガソリン車から EV への大転換「EV シフト」は、自動車部品の製造に欠かせない工作機械にとって、EV 部品の増産に向けた設備投資や、新たな加工に対応するための機械更新といった大きな需要が期待できる機会だ。

この文脈において、次の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを選択肢のうちからひとつ選びなさい。

大きな需要を期待できるのは（ ）である。

①EV シフト      ②工作機械      ③EV 部品の増産      ④設備投資

(p221)

＊

この記事は、わざとのように分かりにくく書いてある。悪文とまでは言えないが、不親切な文だ。こんな文は、読めなくていい。

＊

最も選ばれた選択肢は「EV シフト」です。この記事は、EV シフトそのものではなく、別のあるものの需要が期待できる、ということを伝えようとしています。

( p 221)

＊

そうなんだよ。「伝えようとして」いるが、うまく伝えられていない。

＊

正解は「工作機械」です。「EV シフトは、工作機械にとって大きな需要を期待できる機会」と書かれていますから。「EV シフトに対する大きな需要が期待できる」と読んでしまった、という方は、冒頭の主語にひっばられて誤読しやすい傾向があるのかもしれない。

( p 222)

＊

この説明はおかしい。

〈「EV シフトは、工作機械にとって大きな需要を期待できる機会」と書かれて〉はいません！ これは新井の要約だ。

「冒頭の主語にひっばられて誤読しやすい」作文をする記者が悪い。校閲も悪い。

「冒頭の主語」とは「EV シフト」らしいが、これは「主語」なのか？

「主語」とは何か？ 「述語を伴って文または節を作る」(『広辞苑』「主語」)というのが常識だろう。さて、「EV シフト」が「主語」だとすれば、述語は何か？ 文の構造だけを見れば、「大きな需要が期待できる機会だ」を述語と誤読してしまう。やむを得ない。

逆に考えよう。「機会だ」が述語であることは疑いようがない。では、この述語に対する「主語」は何か。新井の要約によれば「EV シフト」だが、こうした要約ができるのなら、誰も誤読はしない。

新井は「主語」が何か、よく知らないらしい。

「EV シフトは」という文節は、「主語」ではなくて、問題提起の文節なのだ。「機会だ」という述語に対する「主語」は、この記事に含まれていない。「主語」は、新井がやったように、読者が作り出さなければならないのだ。

そのためには、まず、こうした難文に対する直感みたいな何かが働かなければならない。〈何か、変だな〉と覚めることが始まりだ。ただし、どうしたらそういう直感みたいな何かが働くようになるのか、私は知らない。

とにかく、〈この文は分かりにくいな〉と思わないことには、どうにもならない。

その次に、長文を単文に書きなおす。

- 1 ガソリン車から EV への大転換を「EV シフト」と呼ぶ。
- 2 EV シフトは機械更新に関わる。
- 3 誰かが EV 部品の増産に向けた設備投資をする。
- 4 誰かが EV 部品の新たな加工に対応する。
- 5 誰かが EV の自動車部品の製造をする。
- 6 こうした誰かにとって工作機械は欠かせない。
- 7 だから、別の誰かにとって工作機械の機械更新は大きな需要が期待できる。
- 8 その誰かにとって、機械更新は良い機会だ。

こんなもんかな。もっと適切な分け方があるのかもしれない。

要するに、新聞記者は、産業の変化を利用して大儲けをする誰かさんたちの正体を隠蔽しているわけだ。その誰かが確定していないからだろうが、想像はできているはずだ。想像を記事にするわけにはいかないから、誤魔化して書いているわけだ。すでに下調べはできているのかもしれない。〈この続きを待て〉という暗示でもあろう。

「大きな需要を期待できるのは（ ）である」という文も不適當だ。「の」が曖昧だからね。〈「大きな需要を期待できる」分野「は」〉などと明示すべきだ。



しかし、こんな不満を述べても無駄だ。

## 26 あとがき

ぼおっと読んでいたら、次の意見に賛成したくなった。

＊

「学びたいことは本とネットでいくらでも身につけることができるので、学校はもう必要ない」と言って、子どもたちが笑って卒業してくれるのが理想だと私は思っています。

＊

でも、「学校」以外で、笑い合える人々と出会う空間があるのかな？ フリースクールのことが暗示されているのかな？ 「ネット」の中に「理想」の空間ができるのかな？ そんな空間は要らないのかな？

本当に「もう必要ない」のは、「学校」という建物ではなく、文科省と教科書と教師どもだろう。「学校」の真意は〈公教育〉か。

「学校はもう必要ない」と言いながら、不登校にはならなくて、ちゃんと学校に通い続けて、そして、「卒業して」しまうのか。だったら、変な「子どもたち」だな。

この「学校」に、大学は含まれないんだろうね

「卒業」は、通俗的な意味で用いられているのかもしれない。

＊

③比喩的に、ある程度や段階を乗り越えること。「漫画はもう一した」

（『広辞苑』「卒業」

＊

当たらずとも遠からずだったりして。

「理想だと私は思っています」という部分は、〈私の理想だと私は思っています〉と同じ意味だろうか。そうだとすると、自分の思いに自信がないみたいだ。〈私の理想です〉と同じ意味だったら、なぜ、そのように素直に書かないのだろう。違う意味だとしたら、どう違うのか。そういうことでもなくて、「理想」は〈私の「理想」〉ではなく、〈「子どもたち」の「理想」〉だろうか。〈日本人の「理想」〉みたいだけど、無理か。

そもそも、「理想」が怪しいのかもしれない。この「理想」は、いつか現実になるのか。決して現実にならないのか。

そういう話でもない？ ううむ。

「理想」の真意は〈願望〉かもしれない。それに〈予想〉が加味されているのかもしれない。要するに、新井は自分の欲望を自覚できなくて、ついつい、変な言葉遣いをしてしまうのかもしれない。

と、こんな具合に疑うことができるようになったのは、RSTをやったおかげかもしれない。有難う。

さて、次回からは、巻末の「トレーニング&コラム」を読もうか、どうしようか、考え中。指摘したいことはある。

## 27 トレーニング&コラム 初級編①

### ■ 「と」と「や」

さあ、困ったぞ。

＊

問題 同義文判定

○ 次の文を読みなさい。

水星・金星・地球と火星は地球型惑星である。

上記の文が表す内容と以下の文が表す内容と同一か。

「同じである」「異なる」のうちから答えなさい。

水星・金星・地球や火星は地球型惑星である。

(p2)

＊

答えは「異なる」(p3)だ。それでいいのだが、説明が間違っている。

＊

「と」も「や」もどちらも「ものごとを並べるときに使う」言葉ですが、「と」は並べたものですべてのとき、「や」は例示のときに使います。ですから、ひとつ目の文は、水星・金星・地球「だけが」地球型惑星であることを意味しますが、2つ目の文は、地球型惑星の例には水星や金星や地球や火星がある、ということの意味します。

(p3)

＊

「だけが」は間違いだ。「上記の文」に合わせて〈だけ「は」〉とすべきだ。この文を詳しく言い換えると、〈これら四つの惑星以外にも地球型惑星が存在するのかもしれないが、この四つだけは間違いなく地球型惑星だ〉といった意味になる。

「以下の文」のように「や」を用いた場合、〈これら四つの惑星以外にも地球型惑星が存在する〉という含意が生じるが、しかし、この含意は決定的なものではない。

＊

「父や母の意見に従う」では、「父と母双方の意見 (and)」の意にも「父または母の意見 (or)」の意にも解される。

(『明鏡国語辞典』「や」)

＊

「と」と「や」を完全に区別することはできないのだ。  
新井は新井語を捏造し、それを流布しようと企てているのかもしれない。

## 28 トレーニング&コラム 初級編①

### ■ 「は」と「が」

本当に困る。

＊

下記の文章の□に適切な助詞を入れてください。□に入る助詞はそれぞれ1文字ですが、「は」は使わないことにします。（「は」は何にでも使えてしまう助詞なので、使わないルールにしたほうが、答えが一意に決まりやすいのです。

幕府は、将軍□1万石以上の領地をあたえた武士□大名として全国に配置し、各地□支配させました。大名□与えられた領地とそれを支配する組織□藩と呼ばれます。

(p3-4)

＊

おいおい。「は」は使わないこと」という「ルール」だろう？なのに、「幕府は」と始まっているよ。いいの？ どうして、いいの？

「将軍□1万石以上の領地をあたえた武士」の空欄は「が」でいい。「が」しかない。

「大名□与えられた領地」の空欄には「に／が」のどちらかを入れることになっている。「に」が適当だ。「が」だと、分からなくもないが、違和感がある。〈「大名が」「支配する組織」〉というように繋がるからだ。

「組織□藩と呼ばれます」の空欄に「が」を入れたら、「大名が」の「が」と重複し、分かりにくくなる。

比べてみよう。

〈大名が支配する組織が、藩と呼ばれます〉

〈大名が支配する組織は、藩と呼ばれます〉

「は」の方が分かりやすい。

「は」と「が」の区別は、文法学者たちの間で議論になっている。新井は、そのことを知らないらしい。

常識的には、「は」が主語を受けることになっている。「が」は、いろいろだ。だから、新井の「ルール」は非常識だ。

例えば、〈あなたが欲しい〉の主語は〈あなた〉じゃない。〈欲しい〉と思っているのは、明示されていない〈私〉だ。きちんと表現すれば、〈私は《あなたが欲しい》と思っている〉となる。

- 1 彼は彼女が好きだ。
- 2 彼が彼女が好きだ。
- 3 彼は彼女は好きだ。
- 4 彼が彼女は好きだ。

この四つの文は、ほぼ同じ意味に取れる。つまり、〈彼は彼女に好意を抱いている〉という意味だ。このうち、日本語として妥当なのは1と4だ。2と3には、WORDが青線を引いている。ただし、4も明瞭ではない。4の場合、〈彼女は彼に好意を抱いている〉という意味にも取れる。さて、ここまで考えると、1さえ怪しくなる。〈彼は彼女が好意を抱いている男だ〉という意味にも取れるからだ。

『恋人がサンタクロース』という歌の題名に関して、「恋人が」を「恋人は」と覚えている人が少なくないらしい。

林修が、次のような説明をしたそう。

＊

「が」は新情報を提示する時、「は」の方は既知の情報を提示する。『恋人はサンタクロース』っていう言い方だと、恋人がいることはもう知っていますよね、っていう状態。実はサンタクロースだったんですけども。そして『恋人が』は恋人がいるのよ、恋人が、っていうのを強く出すには、「が」。新しい情報で。その人がサンタクロースなんだっていう、付随的に説明がくる。

(「日刊スポーツ」2025年11月10日TBS系「日曜日の初耳学」から)

＊

意味不明。「既に話題となるなど自明な内容で、その点に、事実の描写などで新たな話題を示す「が」との違いがあるとされる」(『広辞苑』「は」)というような話をしたかったのだろう。ただし、『広辞苑』の説明も納得しがたい。

「恋人がサンタクロース」は、〈私の「恋人がサンタクロース」の扮装をしてやって来るとは考えてもいなかったのが驚いた〉などといった文の一部だ。「恋人はサンタクロース」は、〈私の「恋人はサンタクロース」の扮装をしてやって来た〉などの一部で、特に含意はない。

この歌の原典は『ママがサンタにキスをした』だろう。ママがパパ以外の男にキスをしたので、子どもが驚いている。「ママは」だと、このキスは儀礼的に思える。つまり、〈ママはサンタの扮装をしている人にキスをするものだ〉といった意味になり、子どもは驚かない。この題名は男女平等を暗示している。

「恋人がサンタクロース」という文は、性関係について何も暗示していない。分りにくい。だから、「恋人は」と作り替えられるのだろう。その結果、〈女にとって「恋人はサンタクロース」のようにプレゼントをくれる男だ〉といった意味になり、売買婚を暗示することになる。保守的な女たちには分かりやすい。

ビート・タケシがタケシ軍団と一緒に「恋人はチンポ黒い」と歌っていた。冗談なのに、顔は笑っていない。むしろ怒っているみたいだった。彼は元歌の主題を略奪婚と誤解したのかもしれない。もしかしたら、誤解ではないのかもしれない。

とにかく、「は」と「が」の使い分けについて、新井のように単純に決めつけてはいけない。

実話だが、主語であることを示す「が」「の」「(『日本国語大辞典』『格助詞])」という説明を過大視したのか、「は」は提示の役割しかなくて、主語をきちんと表さない。だから、自己紹介のときには「私が」と言いなさい」と教える教師がいた。そして、上岡竜太郎の例を挙げた。舞台に上がるやいなや、彼は「私が上岡竜太郎です」と言っていたそう。その場合、「私があの有名な上岡竜太郎です」という含意が生じるのに。コメディアンなら、そうした傲慢な態度を取っても笑われるだけで済むんだろう。だが、無名の青年が面接試験などで、「私が大卒です」と自己紹介をしたら、合格できまい。〈他の人は大卒ではない〉という含意が生じるからだ。

＊

強力な「Xハ」と微力な「Xガ」とをいきなりいっしょくたにし、それに同じ構文論的役割を振り当てるような文法は——と言えば、現行の文法教科書と参考書のほとんどすべてが、それに該当するのですが、そのような文法は日本語の文法とは言えますまい。日本語自身の形式が無視されています。そして、当然の結果として、日本文法の構文論（シンタクス）はまるでなっていません。

（三上章『像は鼻が長い』「第一章 「ハ」の兼務」）

＊

読解力を向上させたいければ、教科書派か三上派のどちらかに属すべきだ。新井派に属したら、日本人として認めてもらえず、移民扱いされるかもしれない。

＊

言語学的に何ら根拠のない「ハとガの違い」の説明に<sup>こうでい</sup>拘泥し、三上章の「主語廃止論」を一蹴した国語学界の大御所である大野晋も、学問的に正しく批判される日がやがて来るだろう。なにしろ、大野は話題作『日本語練習帳』においても「日本語文法のうち、大切と思われるところのひとつだけを取り上げます」と言って、お得意の「ハとガの違い」に新書の四〇頁以上を費やしている有り様だ。

（金谷武洋『日本語と西欧語 主語の由来を探る』「序章 上昇気流に乗った英語」）

＊

話題の『日本語練習帳』は読んだ。不愉快でならなかった。

さてさて、大野さえ説明に「四〇頁以上」を費やした問題を、新井はたったの一文で始末している。お話にならない。

『シン読解力』など、批判の対象にもならないのだ。

しかし、もう少し、読んでみようか。

## 29 トレーニング&コラム コラム②日本語を「数学語」に翻訳する〈1〉

「数学語」って何だろう。前に出ていたな。読み返す気になれない。鉤で括ってあるから「スラング」かな。だったら、「翻訳」も「スラング」だろうから、鉤で括るべきだ。

＊

数学語の読解では、英語や古文など、「別の言語に翻訳する」教育方法が参考になるでしょう。

(p 45)

＊

意味不明。この文を普通の日本語に翻訳してくれ。

このあたりの話題は、「数学語の読解」ではなく、その逆の〈「数学語」「に翻訳する」〉ではないのか。

「古文」は「別の言語」かよ。違うのかな。この「など」は〈「など」を〉の不当な略かもしれない。この場合、「別の言語」は現代日本語のことだろうが、さて、それはどんな「言語」だろう。「生活言語」か？ 〈国語科専用「学習言語」〉か？

「別の言語に翻訳する」の「別の言語に」は不要。なぜなら、翻訳とは「ある言語で表現された文章の内容を他の言語になおすこと」(『広辞苑』「翻訳・反訳」①) だからだ。

しかし、新井にとっては「別の言語」という言葉が必要なかもしれない。「別の言語」の真意は、〈言語ではないが言語のような用語や語法など〉を含むのかもしれない。たとえば、「蛋白質の生合成で、メッセンジャーRNA 上の塩基配列を読みとり、その情報に対応するアミノ酸を選んでペプチド鎖を合成する過程。遺伝情報が蛋白質の構造として発現する過程の第2段階。(『広辞苑』「翻訳・反訳」②) といった理屈のような理屈でもないような雰囲気を含んでいるのかもしれない。

＊

「死んでまたこの世に戻って来るとして、人でも物でもいいのですけれど、自分で選べるとしたらそれはなにだと思いますか」

このような意味のことをいまの日本語で言おうとすると、いろんな言いかたがあると思う。端正な言いかたから、かなり崩れた言いかたまで、さまざまにあり得るはずだが、伝えたいのは要するにこういった意味のことだ。僕が作った文例は一例にすぎないから、文例に密着して英語を考えなくてはいけない、というわけではない。

密着するよりも、その逆に、日本語での言いかたから無駄な言葉数を削って考える、という練習をしたほうがいい。文例から無駄な言葉を省くと次のようになる。「死んで戻って来るとして、人でも物でも自分で選べるなら、それはなにか?」。日本語としてはそっけない。そっけなさを問題にするなら、少なくとも日常の会話や文章のなかでは、日本語

としてこうは言わないという説も成立する。アンケートの質問文、というような領域でのみ許される言いかただ。

日本語ではそうは言わない、と指摘されるような言いかたこそ、英語の発想そしてもものの言いかたであることが多い、ととらえなおすと、日本語という母国語の呪縛から、少しだけ離れることができる。

(片岡義男『英語で日本語を考える』)

＊

「文例に密着して英語を考えなくてはいけない、というわけではない」というのが常識だろう。新井は〈「日本語という母国語の呪縛から、少し」の努力で解放される〉と思っているらしい。

＊

2に3をたすと5になります。

これを式にすると、「 $2+3=5$ 」です。見比べてみると語順が違うことに気づきます。「2に3をたすと5になる」という日本語をそのまま並べると、「 $2\ 3\ +\ 5\ =$ 」です。一方、英語では「 $2\ \text{plus}\ 3\ \text{is equal to}\ 5$  (または、 $2\ \text{plus}\ 3\ \text{equals}\ 5$ )」で式の順のままです。数式はゲルマン語系なので語順が日本語と異なり英語的なのです。

(p 45)

＊

「日本語」は〈「日本語」の文〉の不当な略。

何のことだか、さっぱり分からない。日本語の場合、「語順」はかなり自由だから、「2に3をたすと5になる」を〈2たす3は5〉と言い換えることができる。しかし、そういう話ではないのかもしれない。本当に、何のことだか、私には分からない。

〈さざんが丸〉は、日本語ではないのか？ サザン・オールスターズは英語だが、山茶花究は日本人だろう、多分。

「語順が日本語と異なり」は意味不明。英語も、日本語ほどではないが、自由だ。

「英語的」は曖昧。

＊

格変化、人称変化のあるラテン語のような屈折語では本来語順は自由であるが、語形変化のない中国語では語順のみが文法的機能をもつ。

(『百科事典マイペディア』「語順」)

＊

新井は屈折語と膠着語を比べたいのだろうか。だったら、説明が足りない。

＊

解き方を教えるというより、日本語で書かれた内容を忠実に式に翻訳する「和文数訳」を繰り返し丁寧に指導するのです。

(p 45~46)

＊

「忠実に式に翻訳する」というのは直訳のことかな。つまり、「外国語をその原文の字句や語法に忠実に翻訳すること」（『広辞苑』「直訳」）か。そうだとすると、「文章が、翻訳する言語として十分にこなれていないさま」（『広辞苑』「直訳的」）になる場合もあるから、要注意だ。

要するに、こういうことかな？

- 1 文章題を読む。
- 2 その文章を「英語的」日本語に改作する。
- 3 それをさらに数式などに作り替えやすい「数学語」に改作する。
- 4 改作した文章を参考にして、数式などを作る。
- 5 その数式などを機械的に解く。

新井は、2の手順を矮小化しようとして失敗し、悪文を拵えている。つまり、「日本語という母国語の呪縛」にかかったまなのだ。

いっそ、英語を日本国の公用語にしちまえば？ せめて算数と理科だけは英語で教えよう。

＊

アイザック・ニュートンとほぼ同時期に微積分を発見したドイツの大数学者ゴットフリート・ライプニッツは「式が代わりに考えてくれる」という言葉を残しています。数学の問題は、それを解釈して式に変換してしまえば、あとは計算で自動的に答えが出るというような意味です。数学において、「読解」がいかに重要かわかる名言です。

（p 46）

＊

まったく理解できない。

「式が代わりに考えてくれる」を「数学語」に翻訳すると、どうなるのかな。

「自動的に答えが出る」というのが理想なら、最初から AI を使えばよかろう。考えたくないだけなら、算盤が有効だ。電卓では駄目。

「というような意味です」なんて、無責任だなあ。自信ある？ 命賭けて？

「名言」の「意味」なんて、どうせ名人にしか理解できない。だから、新井には理解できても、私には理解できない。

普通に「解釈」したら、この「名言」は逆説で、つまり、非常識で、冗談ってことだよ。「微積分」だと、〈式で考えるしかない〉のかもしれない。

### 30 トレーニング&コラム コラム②日本語を「数学語」に翻訳する（2）

もう、おしまい。やれやれ。

＊



問題：4000 円のセーターが 3 割びきになっていました。ねだんはいくらでしょう。

(中略)

誤答のパターンはほぼ 2 つです。

誤答 1： $4000 \div 0.3$  と立式する。

誤答 2： $4000 \times 0.3 = 1200$  と立式し、1200 円を答えに書く。

＊

「立式」は何と読むのだろう。〈りっしき〉は『広辞苑』にない。

この問題文の「翻訳」が後に示されている。新井のお奨めの襷掛け式「翻訳」なんか、ややこしいし、特殊な場合にしか役に立たない。また、覚えてもやがて忘れる。いろんな公式などと一緒にだ

点取り虫は九九を使わないと〈 $3 \times 3 = ?$ 〉に答えられない。〈 $3 \times 3 = 3 \times 2 + 3 = 3 + 3 + 3 = 3 + (1 + 2) + 3 = 3 + 1 + 2 + 3 = 4 + (1 + 1) + 3 = \dots\dots$ 〉といった具合に数え上げに戻れないのなら、九九を忘れたら、あるいは、間違っただけで暗記したら、手も足も出ない。

満点か、零点か。二者択一の評価は暴力的だ。

普通に考えよう。

「3 割びき」だから、半額の 2000 円より高い。3000 円よりは安いかな。まず、大雑把に見当が付けられなければならない。そういうことができないのなら、この問題に挑戦するのは早すぎる。

算数に限らず、文章の内容が想像できないで枝葉末節に拘っても、理解はできない。根幹が発見できればならない。だが、根幹の発見は容易ではない。枝葉末節どころか、咲いた花に目を奪われがちだ。世界に一つだけの花を見つけたら、つまり、自分にとって都合のいい「名言」を見つけたら、それを呪文のように唱えながら生きることになる。

この問題文の場合、数が増えたり減ったりする様子が想像できるようでなくちゃ、子どもらしくない。式を作るのは、想像ができてからだ。

どうやって想像するのか。言うまでもなかろう。数直線だ。新井は忘れたのかな。だったら、子どもにも教えてもらいな。まず、直線を引いてね、それを十分割するの。で、その直線の上に「4000 円」と記して……。もう、いいよね。

もっと素朴な方法から始めようか。百円玉 40 枚を 4 枚ずつに分けて、十の塔を作り、三つの塔をよそにしまって、七つの塔の百円玉を数える。チュウチュウタコカイナ。

未知数を  $x$  とおいて方程式を作るのは簡単だ。しかし、自分が何をやっているのか、分からなくなる。「式が代わりに考えてくれる」という仕事に慣れてしまうと、思考力は育たない。

数直線の見方は人それぞれだ。

誤答 1 の人にお奨め。 $4000 \div 10 = 400$   $400 \times 3 = 1200$   $4000 - 1200 = ?$

誤答 2 の人にお奨め。 $4000 \times 0.3 = 1200$   $4000 - 1200 = ?$

スマートな式。 $4000 \times (1 - 0.3) = ?$

はなっから最短距離を探してはいけない。タイプでは習熟できない。紆余曲折を経ることが大切だ。いろんな解き方を考えて、あるいは、他人の解き方を見て、そして、どの解き方でも同じ答えになるということを知る。そうやって、やっと計算を信用できるようになる。やがて、論より証拠ではなく、証拠より論だと思えるようになる。

近道を探せば遠回りをしかねない。遠回りのようでも自分の歩きたい道に進むしかない。急がば回れ。損して得取れ。「名言」だろう？

失敗は成功の元とは限らないが、失敗を恐れて公式の丸暗記をやって点数稼ぎを続けていたら、やがて燃えつきる。向学心が育たないなんて、そんな程度ではない。生きる気力が失せる。死にたくなる。

「大数学者」みたいな天才以外、どうせ AI に負けちゃうんだよ。稼げる「仕事」なんか、そうそう、あるもんかい。負けるが勝ちと諦めるしかない。問題は、どう負けるか、だ。

結論。

こんな本を読んではいけない。

蛇足。

読んだら読解力が鈍る悪文は山ほどある。それを選別するための判断力や何かが、編集者たちに欠けている。彼らに SNS を非難する資格はない。当然、素人にも判断力が欠けている。だから、売らんかなで、悪文の著書や情報などが売れまくる。徐々に多くの人の思考力が落ちる。しかし、言葉は必要だから発信され続ける。くだらないスローガンが受けて、やがて出鱈目な政治屋が権力を握る。彼らは全体主義者ですらない。右翼とか、左翼とか、宗教とか、そういう確かな信念に基づいて行動する強権的政治家ではない。狂犬的政治屋だ。拡散される悪文によって日本語による社会は滅びる。バベルの塔のように滅びる。その日は近い。いや、すでに始まっている。私は崩壊に捲き込まれないように気をつけたい。しかし、実は死を覚悟すべきなのかもしれない。精神的死だけではなく、飢餓や公害などによる肉体的死をも。

笑うしかない。

(『シン読解力』終了)